再建主義ウォッチング掲示板　過去ログ

2004年9月11日(No.536)〜10月28日（No.649）

米国のキリスト教新右翼思想である「キリスト教再建主義」（Reconstructionism, Dominion Theology, Kingdom Now Theory, Theonomy）に対して、真剣な憂慮を表明する立場に立つ人たちのための、情報交換・意見交換・問題提起のための掲示板です。なお、この掲示板の趣旨と関係がないと管理者が判断した書き込みについては、書き込んだ方への事前の承諾を求めずに、一方的かつ独断的に削除することがありますので、ご了承ください。

再建主義ウォッチング掲示板　現行ログ

649 安全装置としてのネットワーク　山谷 - 2004/10/28 10:36 -

友情、あるいは、ネットワークとしての「カバーリング」というものも、確かに、あるかもしれませんね。

無教派カリスマ・非教派カリスマ・非教派的第三の波派（福音派の教団に属する信徒や牧師であったが、聖霊刷新を体験したために、教団を離脱せざるを得なくなった人たち）が、日本において何年か前、「日本リバイバル同盟」を設立しました。これは、カリスマ系の単立の諸教会にとって、＜ネットワークによるカバーリング＞としての重要な意義を持っていると思います。

日本では、使徒的宗教改革・王国神学・王国現在論が、まだ、再建主義との関わりという観点からクローズアップされてはいません。しかし、ピーター・ワグナーが指導的な役割を果たしてきた「AD2000とその後運動」が、＜10/40の窓＞や＜戦略レベルの霊の戦いによる世界宣教＞や＜とりなしの祈り＞といったかたちで、これまで日本リバイバル同盟系の諸教会に、大きな影響を与えて来ました。

今後、「AD2000とその後運動」の流れにある諸教会は、ピーター・ワグナーの後について「使徒的宗教改革」の方向に進んでいくのか、そうして、さらにその先にある「再建主義」にまで向かっていくのか、そう遠くないうちに、決断を迫られることになるでありましょう。

その時には、「AD2000とその後運動」と関わりがある日本リバイバル同盟も、＜回復された使徒＞＜王国神学＞＜王国現在論＞＜再建主義＞という複雑な問題について、カバーリング機構としての立場から、白黒をはっきりさせなければならないことになるでありましょう。

ことは、カリスマ系諸教会の21世紀の世界宣教戦略の根幹に関わる「パラダイム」の問題ですから、その際には、カリスマ系諸教会の神学者が、神学者会議を招集して、集中的な研究と討議を行って、結論を出すべきであろうと、いまのうちに提案しておきます。

『クリスチャン新聞』2004年10月31日号は、「AD2000とその後運動」について、ローザンヌとの関わりで、こう述べています。

「89年、フィリピンで開かれた『ローザンヌIIマニラ会議』で、世界宣教達成へのより具体的な目標設定と戦略づくりの必要を強調する人々がローザンヌ運動から分かれて『AD2000とその後運動』を旗揚げして以来、本体のローザンヌ運動は求心力を失い、ヨーロッパやアジアでの地域レベルの小規模な宣教会議が開かれるだけになっていた」

ピーター・ワグナーが中心となって、ローザンヌから分かれた「AD2000とその後運動」で

あったわけですが、それが「使徒的宗教改革」へと向かう動きを見せている今、求心力を失ったローザンヌが、再び福音派の世界宣教への結集を呼びかけるために、先ほどタイのパタヤで「ローザンヌ世界宣教フォーラム」を開催したことは、重要な意義があったと思います。

おそらくは、今後「AD2000とその後運動」がいよいよ「使徒的宗教改革」の路線を進むにつれて、その＜変質＞に耐えられなくなった諸教会が、ある程度、出てくるものと思われます。そのときには、ローザンヌが再び受け皿としての役割を果たすことが、大いに期待されます。重要なのは、そのときのために、今からローザンヌが、カリスマ系諸教会に対して入口を開けておいてあげることです。

そのためには、福音派の諸教会が、伝道と社会正義のバランスの取れた理解を持つだけにとどまらず、聖書主義とカリスマ刷新とのバランスの取れた理解をも、構築して行くことが必要でしょう。

647 もうひとつの安全装置 JOG - 2004/10/27 19:45 -

＜聖書正典＞＜信条＞＜監督＞という三重の安全装置

これにもうひとつの安全装置を提案したいと思います。

「友情」です。または「ネットワーク」です。

単立教会であっても、教団・教派を超えて、少しおかしくなった時に、愛をもって、柔和な心で、忍耐強く諭してくれる「友情」です。

そんな友達がたくさんいれば、たとえ単立教会であったとしてもだいぶまもられるのではないでしょうか？いや、単立教会ならば切実に絶対に必要なのではないでしょうか？

奥村牧師が富井氏に言いたかったのはそのことだと思います。富井氏はあくまでも「神学論争」の土俵からでることはなかったようです。

また、なぜ、教団や所属教会からでてしまったか？そこには「友情」が機能しきれなかったのではないかと思わされています。

646 老いを受容すること JOG - 2004/10/27 19:37 -

山谷大尉様、以前、悪口雑言を書いてしまった私に対して丁寧なレスをしてくださりありがとうございました。

セオノミーに関心のなくなってしまった私は、最後のご挨拶にと書きこむつもりが、ついつい興味ある話題に繰り返し書き込みをしてしまっています。

＞死ぬことがない、というのは、文字通り、身体的な死を迎えることがない、ということのようです。

ですので、回復された使徒が指導するメガチャーチは、指導者の死による世代交代を、それほど心配する必要がないのかもしれません。

実は私、老人介護に関係する働きをしています。そこで学ばされるのは、人間は必ず老いるも

のであり、死ぬものであるということです。この一ヶ月でも二人の人の死に関わりました。

さて老人介護のある専門家が「若はげはボケにくい。」という説を出したそうです。なぜかというと、若はげは若い時から、自分の「老い」と直面し、「老い」を受容する準備ができるそうです。ある種類のボケの原因が「老い」を受容できない苦しみにあるということです。

どんなに自分が認めなくても、心配しなくても、「老いは」平等にやってきます。

願わくば、弟子たちのために自分の命を捧げられた、イエス様やパウロのような「父」の心をもった器がたくさん現れますようにお祈りいたします。

645 ＪＯＧさまへ（２） 山谷 - 2004/10/27 14:02 -

＞神様中心よりも、人間中心の信仰生活...神様の思いよりも人間の思いにより合致するメッセージ

その典型例が、いわゆる「繁栄の福音」（Prosperity Gospel）でありましょう。王国神学／王国現在論では、全世界に出て行って福音を宣べ伝えよという「大宣教命令」に、繁栄の福音を読み込む解釈をしています。つまり、＜キリスト者は神の祝福によって経済的に繁栄することが約束されているのだから、キリスト者が経済的に成功して大きな富を獲得し、その繁栄ぶりを異教徒に見せつけることが、キリストをあかしすることである＞と考えるのです。

このような考え方から、＜経済的成功を追及するキリスト教＞＜聖書から得るビジネスモデル＞＜ささげればささげるほど収入が増える＞というような教えが出てくることになります。

使徒を自称する人物が按手して個人預言をしてくれて、しかもその内容が、「あなたがビジネスをすれば、必ず成功して、大金持ちになります。その富を、伝道のために使いなさい」と言ってくれる・・・そういうことが、実際にあるようなのですが、これなどは、イエスの「針の穴の譬え」とかヤコブ書5章の教えと、どう調和するのか、首をかしげてしまいます。もっとも、ロゴスよりレーマが優越するのであれば、解釈原則的には首尾一貫している、ということになるわけですが・・・。

644 JOGさまへ（１） 山谷 - 2004/10/27 14:02 -

＞カリスマ信仰をもって、所属教会や教団をでるとそんなにおかしくなってしまうのでしょう

カリスマ系の教会では、神の御言葉に「ロゴス」と「レーマ」の二種類がある、という捉え方をするようです。

「ロゴス」は、旧新約聖書66巻の聖書正典であり、「レーマ」は、聖霊によって直感的・即座的に与えられる啓示で、＜知恵の言葉＞＜知識の言葉＞＜異言＞＜異言の解釈＞＜預言＞などの種類があります。

通常のカリスマ派であれば、＜ロゴスがレーマに優越する＞あるいは＜ロゴスによってレーマを批判的に検討する＞という原則があります。いわゆる「預言の吟味」は、これにあたります。

ところが、ある種のカリスマ派では、ロゴスをレーマと対等に扱ったり、場合によっては、レーマをロゴスに優越させることすらあります。

通常の教会であれば、その信仰と実行について、＜聖書正典＞＜信条＞＜監督＞という三重の安全装置がかかっていることによって、逸脱を未然に防いでいるわけです。

ところが、無教派カリスマ・非教派カリスマ系の教会が「レーマをロゴスに優越させる」ということをした場合、それらの教会は神学や伝統を持たない単独教会主義である場合が多いですから、結果として、（１）聖書正典というブレーキがかからず、（２）信条というブレーキがかからず、（３）監督のカバーリングによるブレーキがかからず、言わば、ブレーキが完全に壊れた自動車のようになって、暴走し、正統的キリスト教から逸脱して行ってしまうわけです。

また、無教派カリスマ・非教派カリスマではなくても、特定の神学や伝統を強調しない単独教会主義の教会（バプテストや無教会派）がカリスマ刷新を経験して、ロゴスよりレーマを優越させるようになった場合、やはり同様にして、正統的キリスト教から逸脱してしまうことがあります。日本の場合は、原始福音（キリストの幕屋）や国際純福音教会（バプテスト系のカリスマ派）が相当します。

王国神学／王国現在論に拠る「使徒的宗教改革」の場合は、ロゴスよりレーマを優越させる、というよりは、むしろ、＜回復された使徒たちを通して、聖書正典にはない「新しい啓示」が与えられる＞と考えるようです。

もし「使徒的宗教改革」が目指す方向性が、＜回復された使徒たちによる、ロゴス（聖書正典）に基く、「国家と社会と教会」の統治＞であるならば、これは、再建主義の亜流、ということになります。

しかし、それが、＜回復された使徒たちによる、レーマ（直観的啓示）に基く、「国家と社会と教会」の統治＞であるならば、むしろ、再洗礼派の亜流、ということになります。

＞トップ指導者が倒れたり、長く継続しても老化にともなうトップ指導者の世代交代といった事態に、無教派のメガチャーチが対応できるのでしょうか？

王国神学／王国現在論に拠る「使徒的宗教改革」を唱える人たちの中には、回復された使徒が＜死に打ち勝つ＞という「不死の教義」を唱えている人もいるようです。もちろん、こんな極端な説を奉じる人は、使徒的宗教改革の中でも少数派であろうと思うのですが・・・。この「不死の教義」とは、＜回復された使徒は、神の勝利者として、最後の敵である「死」にも打ち勝っているので、その使徒が聖潔の生活を維持している限りは、死ぬことがない＞というものです。死ぬことがない、というのは、文字通り、身体的な死を迎えることがない、ということのようです。

ですので、回復された使徒が指導するメガチャーチは、指導者の死による世代交代を、それほど心配する必要がないのかもしれません。

643 玉漢欽師no JOG - 2004/10/24 08:13 -

玉漢欽師は諸外国がうらやむような韓国の教会成長に対して著書「信徒を目覚めさせよう」のなかで警告しています。

「現在波のように教会に押し寄せる人が、いつかは完全に離れ去る可?#92;性がある。」
「神様中心よりも、人間中心の信仰生活...神様の思いよりも人間の思いにより合致するメッセージ....この朦朧とした眠りから覚めなければならない。」

「物量主義に目がくらまされて、一人のたましいの尊い価値とその可?#92;性をよく理解できない教会指導者になってしまうこと。」

数の大小が人間の努力とその業績で脚光を浴び、それが神様の栄光をさえぎり、その御心を曇らせる時には、神様はきっぱりとその数を喜ばれません。（１コリント10：5　１歴代21）

（ロシア正教会がロシアの共産主義化を阻止できなかった退廃ぶりと、韓国国民が常に共産主義の危機に直面している状況について述べた後に）
「キリスト教がそれ自体の原理に忠実ではない土壌に共産主義が根をおろした。....共産主義はキリスト教が失敗した理想世界の実現を自らができるとうぬぼれています。このような意味で共産主義をキリスト教異端の一種であるといっても決して間違っていることはないでしょう。」

642 メガチャーチの脆弱性 JOG - 2004/10/23 03:17 -

世代を超えたメガチャーチってどれくらいあるのでしょうか？

私のメガチャーチへのイメージはカリスマ的な魅力もった指導者にお客さん的に集う信徒さんの集まりといったイメージがあります。

トップ指導者が倒れたり、長く継続しても老化にともなうトップ指導者の世代交代といった事態に、無教派のメガチャーチが対応できるのでしょうか？

たとえ、もしも、アメリカの教会において多数派になったとしても、何年も続くのでしょうか？５年ぐらいで、また違ったムーブメントに変わってしまったり、分裂して、変わったことを始めたりするのではないでしょうか？政治を動かすほどの安定した影響力になるようには思えないのですが。

641 無教派カリスマ派と非教派カリスマ派 JOG - 2004/10/22 21:28 -

山谷大尉様、聖霊派についてわかりやすく教えてくださりありがとうございます。

無教派カリスマ派と非教派カリスマ派もカリスマ信仰を持つまでは、正統的な福音派としての伝統や、教理を受けついてきていたことと思うのですが、なんで、カリスマ信仰をもって、所属教会や教団をでるとそんなにおかしくなってしまうのでしょう。私にとっては謎です。

また、非カリスマ、非ペンテコステの立場での単立教会ってたくさんあると思いますが、単立になってもそれぞれの背景の伝統や教理は堅持しているところがほとんどだと思うのです。改革神学の立場にたつ単立教会、バプテストの単立教会、ウェスレー主義の単立教会など、たくさんあると思います。それらの単立教会は伝統や教理を重んじられるのに、なんでカリスマの単立はそんなにおかしくなっちゃんうんでしょうね。

640 再建主義と聖霊派（３） 山谷 - 2004/10/22 14:20 -

しかし、アメリカにおける傾向として、「脱教団教派の教会」が急激な教会成長を見て、メガチャーチを次々に設立しているのに対して、旧来の教団教派の教会は（古典的ペンテコステ派やメインラインのカリスマ派を含めて）新興のメガチャーチに会員が移動して、全体として減

少傾向にあるようです。

アメリカ合衆国全体としての教会出席人口は減少していますから、構図としては、脱教団教派の教会が大きくなり、旧来の教団教派の教会は小さくなっている、という絵になります。

この傾向が今後も継続し、脱教団教派のメガチャーチが多数派を占めるようになり、しかも、それらの教会が「王国神学」のパラダイムを採用した場合には、アメリカにおける再建主義の影響力が、今よりもっと強くなる、ということが、起こりえます。

だからこそ、憂慮しなければならないわけですね。

639 再建主義と聖霊派（２） 山谷 - 2004/10/22 14:09 -

再建主義の亜流である「王国神学」は、教団教派を否定する傾向を持つ「使徒的宗教改革」と密接な関わりを持っているわけですから、教団教派の教会が「王国神学」を受容することは、あり得ないわけです。

そこで、「王国神学」を受容する可能性が大きいのは、非教派的カリスマ派ということになります。下記の分類で該当するのは、「レストレーション運動」「無教派カリスマ派の中の非教派カリスマ派」、「非教派的第三の波派」、「ポスト教団教派の教会／脱教団教派の教会」ということになります。

一方、「古典的ペンテコステ派」、「カリスマ派／メインラインのカリスマ派」、「新教派カリスマ派」、「聖霊の第三の波」は、いずれも、教団機構によるカバーリングを重視しており、また、使徒による教団教派の解消というようなパラダイムを持っていないので、これらが「王国神学」にコミットすることは、あり得ず、それゆえ、再建主義の影響を受けることも、あまりないであろうと考えられます。

638 再建主義と聖霊派（１） 山谷 - 2004/10/22 14:01 -

聖霊派には、歴史的に、以下のような分類があります。

古典的ペンテコステ派

古典的ペンテコステ派は、教団機構による適切なカバーリング、ウェスレアン・ホーリネスに近い聖化論、禁酒禁煙などのアスケーゼ（禁欲）、前千年期再臨説の終末論を保持しています。

レストレーション運動（回復神学／後の雨運動）

1940年代後半からカナダを中心に始まったレストレーション運動は、最初はキャンプ・ミーティング方式による神癒のリバイバル集会でしたが、預言者ブランハムの指導のもとに、「五役者の回復」や「バビロンとしての諸教派に分裂した教会」や「再臨切迫」を唱えるようになりました。この流れが、＜回復された使徒による世界統一教会の形成＞という王国神学の概念に、影響を与えていると考えられます。

カリスマ派（あるいはメインラインのカリスマ派）

1950年代後半から60年代にかけて、メインライン（聖公会、ルーテル、改革長老、メソジス

ト、バプテスト、カトリック）の教職や信徒が、異言を伴う聖霊のバプテスマを体験したことにより、主流各教派の中に聖霊刷新運動が起こりました。これは、聖公会カリスマ派とか、ルーテル・カリスマ派などと呼ばれます。聖霊体験を重視しながらも、所属教会の歴史・伝統・神学・機構を尊重します。

無教派カリスマ派

メインラインのカリスマ運動が進む中で、所属教会内に適切な受け皿を作ることが出来なかった教職と信徒は、教会を離脱して、独自のグループを作りました。多くは、単立教会や新教団を形成しましたが、スモールグループによる教会形成を目指す「シェファーディング運動」を行うところもありました。後者は、無教派カリスマ派の中の**非教派カリスマ派**です。

一方、1970年代に米国西岸を中心に起きた「イエス革命」から、急激に成長する教会群が誕生しました。1960年代のカリスマ派が、所属教会の歴史・伝統・神学・機構を尊重したのに対して、「イエス革命」から生まれた教会は、旧来の諸教派の神学的伝統にはコミットせず、むしろ、中国のウォッチマン・ニーの著作から多大な影響を受けました。このため、メインラインのカリスマ派から区別される意味で、無教派カリスマ派と呼ばれますが、カバーリング機構としての新教団を設立したことから、むしろ、**新教派カリスマ派**と呼ぶべきでしょう。代表的な教団に、チャック・スミスのカルバリー・チャペルがあります。

聖霊の第三の波

カルバリー・チャペルの群れから分かれて、急激な教会成長を見たジョン・ウィンバーが、教会成長学者のC.ピーター・ワグナーに協力して、フラー神学校世界宣教学部で「MC510」というコースを行いました。このコースは、異言を伴う聖霊のバプテスマを「必須条件」とは見なさず、むしろ、「しるしと不思議を伴う宣教」を重視したことから、福音派に影響を与え、福音派内の聖霊運動としての「聖霊の第三の波」が始まりました。

60年代と同様、80年代の場合も、所属教会内に適切な受け皿を作ることが出来なかった教職と信徒は、教会を離脱して、独自のグループを形成しました。これも、広義の「無教派カリスマ派」に入りますが、より正確には、**非教派的第三の波派**と呼ぶべきでしょう。

1990年代後半以降の聖霊運動

無教派カリスマ派、非教派カリスマ派の影響を受けた伝道者が、しるしと不思議を伴う宣教、教会成長理論、スモールグループ（セルグループ）、ワーシップ・スタイルの礼拝などを採用して、急激な教会成長をしました。これらの伝道者たちは、旧来の教派の伝統的神学にコミットせず、むしろ、独自の聖書解釈による実践に重きを置いているため、「無教派カリスマ派」と呼ばれます。しかし、70年代の「無教派カリスマ派・非教派カリスマ派」と区別するために、より適切には**ポスト教団教派の教会**あるいは**脱教団教派の教会**と呼んだほうがよいかもしれません。

一方、回復神学の影響から、90年代後半より、「預言の回復」、「使徒の回復」の運動が起こり、世界的な（自称）預言者や使徒のネットワークが形成されるようになりました。ピーター・ワグナーは、爆発的は教会成長を指導する少壮牧師たちを「回復された使徒」と観ることにより、教会成長運動と回復神学とを結合させました。「現代の使徒」と目された牧師たちは、いずれも強い脱教派的指向を持っていますから、最初ワグナーはこれを「ポスト教団教派運動」と名付けたのですが、諸教派の教職から反論を受けたため、**使徒的宗教改革運動**に変更するに至りました。

633 余談ですが JOG - 2004/10/21 22:31 -

余談ですが、あるカリスマ系神学校をでた自称「ペンテコステ信仰を持つ」牧師が、その神学校の信仰的立場についてこのように語っていました。

「あそこはぼやけているんだよ。信仰というのは神か悪魔か二つに一つなのにね。あそこは人間の魂の領域は中立だというんだよ。だから弱さを受け入れようとなってしまうんだな。それでね、サタンを受け入れてしまうんだ。」

その牧師が言うカリスマとペンテコステの信仰の違いだそうです。

そのような信仰の姿勢ゆえにペンテコステ教会は様々な痛みを経験してきたと思います。最近はだいぶ変わってきたのではないかと思わされます。

しかし、不思議なのはピーター・ワグナーを含めて、第三の波の人たちのほうが圧倒的に逸脱的な面がみられるような気がするのですが、、、

この人たちはたかだか十数年前までは誇り高き福音派で、カリスマ・ペンテコステをおかしな人々と見下げていた人が多いようなのですが、、、

632 お久しぶりです。 JOG - 2004/10/21 22:22 -

山谷大尉様、おひさしぶりです。

＞一切の妥協を排する再建主義者は、見解を異にする他の再建主義者に対して「アナテマ」を唱え、教会からの除名という戒規の執行を要求するわけです。

＞これは、トーラーの決疑論的解釈を徹底的に遂行したために、対立する数千数万の議論へと展開して行った、ユダヤ教の『タルムード』にも似た状況であると言えるかも知れません。なぜ、ラビたちが数千数万の議論へと相分かれて行ったかを考えますと、元来パレスチナの風土での生活を前提として与えられた司法律法を、はるか後代の海外での生活に無理やり決疑論的に適用しようとしたことに、一因があると考えられます。

このあたりが、「律法主義的信仰」を生み出す理論的メカニズムだと思われます。この掲示板に間借りさせていただいて私がふれたかったことの中心がここだと思います。

以前にも私の言動について謝罪させていただきました本当にすみませんでした。それと同時に感謝をあらわしたいと思います。
　この掲示板をとおして、また、この掲示板を通して知り合った方々とのその後の交わりを通しまして、心の整理がつきました。すなわち、セオノミーに対しての関心がほとんど無くなりました。

　山谷大尉様も日本のセオノミーにはほとんど関心がなくなられた様子ですね。

　私は、アメリカのカリスマ系セオノミーにも関心はありません。いくら神学的に弱いカリスマ・ペンテコステであっても、上記のような「律法主義的信仰」に導くメカニズムに気づくならセオノミーに流れる可能性はないと思います。他の様々なムーブメントのように現れては消えてゆく花火のようなものではないでしょうか？

631 再建主義ウォッチングについて（２） 山谷 - 2004/10/20 22:54 -

一切の妥協を排する再建主義者は、見解を異にする他の再建主義者に対して「アナテマ」を唱え、教会からの除名という戒規の執行を要求するわけです。このことを、ゲイリー・ノースは、デイビッド・チルトンに対して行いました。

しかし、まさにその妥協を排する姿勢のゆえに、再建主義は、フランシス・Ａ・シェーファーが説いたような＜小異を看過し大同を掲げて集結するキリスト者の統一戦線＞を形成することが、不可能なのです。

この「再建主義ウォッチング掲示板」は、そもそもは、富井氏とわたしとの議論が、富井氏からの終結宣言をもって打ち切られたことから、開設されるに至ったものです。

おそらくは、両者の間で今後直接議論が戦わされることはないであろうと思われることから、議論掲示板ではなく、「ウォッチング掲示板」となっているわけです。

富井氏との議論がすでに終わっていることから、このウォッチング掲示板は、富井氏の標榜する日ユ同祖論的再建主義（もしくは日本主義的再建主義）だけではなく、パーシャルプレテリズム再建主義、フルプレテリズム再建主義、二契約論再建主義、非二契約論再建主義、前千年期説再建主義（もしくは無教派カリスマ主義的再建主義／王国神学／王国現在論）をも、広く視野に入れることを目指しています。

再建主義の現状を考えますと、最大の脅威は、カルヴァン派／改革派のような厳密な神学的思索の蓄積を持っていないゆえに、聖書神学軽視・実践神学偏重になりがちな、そうして、そのことのゆえに、容易に小異を看過して大同で団結することが可能となってしまう、「無教派カリスマ主義的再建主義」であると思われます。

この流れは、アメリカの宗教右派のある程度を占めており、前千年期再臨説を採用し、カリスマ的でありつつも、現代社会に対する司法律法の適用を求めて行くという、再建主義の枠を超えた再建主義です。

そうして、再建主義が目指す「相続税の廃止」「同性愛者や堕胎者の公開処刑」「死刑の厳密な執行」「公的福祉の削減」といった究極の政治的アジェンダが、アメリカの現実の政治的状況に合うよう減圧され「現実的アジェンダ」に姿を変えて登場して来るのは、まさにこの、「無教派カリスマ主義的再建主義」をはじめとする宗教右派においてであるのです。

宗教右派は、ご存知のように、アメリカ大統領選挙のキャスティング・ボードを握っているわけですから、宗教右派の掲げる政策は、連邦政府の政策に反映されることが、可能になるわけです。そうして、再建主義の政治的アジェンダが、現代政治において、「相続税の廃止」「合衆国憲法の修正条項による同性間結合の禁止」「公的福祉の削減」「胎児に対する殺人罪・暴行罪の適用」「死刑の厳密な執行」といったかたちで、すでに実現しつつあるわけです。

今度の大統領選挙の結果次第では、相続税の廃止が、さらに一歩、実現に近づくことになるでしょう。

それゆえに、わたしとしましては、日本主義的再建主義よりはむしろ、無教派カリスマ主義的再建主義（王国神学）の動向に、いま、最も関心を持っているところなのです。

630 再建主義ウォッチングについて（１） 山谷 - 2004/10/20 22:54 -

再建主義とひとくちに言いましても、再建主義陣営の内部は、いろいろな立場に分かれているのが現状です。再建主義創始者と言われるラッシュドゥーニーと、その女婿のゲイリー・ノースにしても、同じ再建主義を標榜しつつも、見解の相違から、たもとを別ってしまいました。

フルプレテリストの谷口明法師が言っていますように、再建主義者は再建主義者同士の見解の対立から、個々バラバラになって活動するという傾向があるようです。

これは、トーラーの決疑論的解釈を徹底的に遂行したために、対立する数千数万の議論へと展開して行った、ユダヤ教の『タルムード』にも似た状況であると言えるかも知れません。なぜ、ラビたちが数千数万の議論へと相分かれて行ったかを考えますと、元来パレスチナの風土での生活を前提として与えられた司法律法を、はるか後代の海外での生活に無理やり決疑論的に適用しようとしたことに、一因があると考えられます。

キリストの十字架による旧約律法の廃棄を説く「新約聖書のキリスト教」は、異教の国家権力をも＜キリストの下僕＞と捉え、自然法を＜異教徒の心に記された神の律法＞と捉えることによって、パレスチナという風土を離れて、爆発的に海外に拡大することが可能になりました。それを顕著に示しているのが、使徒言行録15章に見える、使徒会議が裁定した「ノアの四戒」と、ローマ書13章に見える「中間時の中間倫理」であったわけです。

これに対して、再建主義は、司法律法を現代社会の＜国家・社会・教会＞という全法領域、あるいは、宇宙論的な15の法領域に対して、決疑論的に適用しようとするわけですから、再建主義者が、かつての『タルムード』と同様、「百家争鳴」の状態となるのは、むしろ、当然の成り行きでありましょう。

629 ウソの体系？ ３３４ - 2004/10/20 18:05 -

いつも思うのですが、富井氏の発言は、自分のことを言っているのではないかと思わされます。

「壮大なウソの体系は、土台から末端までウソで塗り固められているから、信者は議論することを嫌う。突っつかれることを恐れる。」（富井氏）

この態度は、富井氏そのものではありませんか。

再建主義に限らず、狂信的な信者はみな同じような精神構造を持っています。

「自分の目に梁があるのに・・・」というわけですね。

・・・・という具合に、ミレニアムＨＰから富井氏の文章をここに貼り付けて批判するということを、参加者のみなさんにやって欲しいわけです。富井氏自身がここに参加されたらなおよいです。

628 真の議論 ３３４ - 2004/10/20 17:55 -

この掲示板の過去ログを読んでみますと、いろいろな神学論争が展開されておりますが、山谷先生への苦言は２・３あったとしても、富井氏との対決があまり見られません。

主宰者の山谷先生に苦情を言っても、どうしようもないわけで、やはり掲示板の主旨にした

がって、再建主義者・富井を俎板にのせなければならないと思うのです。

クリスチャンの側からも、世俗の側からも、富井氏の文章を引用して、それを徹底的に批判する。必要とあらば、富井氏本人に、登場していただく。

それくらいやらなければ、ほんとうの「再建主義ウォッチング」にはならないと思うのです。

まず、富井氏を俎板にのせましょう。そこから面白い議論が始まるのです。

627 富井氏をマスコミに取り上げる ３３４ - 2004/10/20 17:47 -

再建主義者・富井氏のことは、「風変わりな人物」ということで片付けられるかもしれませんが、一度マスコミ（雑誌）で取り上げてみるのも悪くないと思います。

直接富井氏に取材し、また同時に識者の意見も掲載すれば、いいと思うのですが、いかがでしょう？

富井さんも、それを望まれているのではないでしょうか。

富井氏の再建主義は、一部のクリスチャンの間だけで議論される問題ではなく、もっと大衆的視野で日の光のもとに公開され、吟味されるべきだと思います。

キリスト教関係者の狭い世界だけで、陰険な論争を繰り広げていても、あまり建設的とは思えないからです。

626 再建主義は、陰謀か？ ３３４ - 2004/10/20 17:16 -

ミレニアムＨＰを読んで色々なことを考えています（そのほとんどは取るに足らないことですが）。

富井氏は、独身なのですか。また、どうやって生活しているのですか。

パソコンを買い、インターネットを駆使する人間が、そんなに貧しい境遇とは思えませんし、だからといって、富井氏は教会運営にも関わってないみたいだし・・・謎だらけです。

ついつい、「イルミナティ」みたいな団体からお金をもらっているのかな、などと妄想してしまいます。

そういう秘密結社は、キリスト教のある部分を破壊しようと計画した場合、まず善良で真面目なクリスチャンを利用すると思います。

富井氏も再建主義も、そういう闇の勢力に知らず知らずのうちに利用されている、ということはありませんか。

それからインスピレーションに関するある本の著者も「富井健」となっていますが、ミレニアムの富井氏と同じ人物なのでしょうか？

625 王国神学の六点 山谷 - 2004/10/15 16:44 -

小論「王国神学の六点」をアップしました。

「王国神学の六点」

623 今後の議論にあたり（２） 山谷 - 2004/10/03 22:56 -

さて、これから、王国神学／王国現在論を論じて行くにあたって、ピーター・ワグナーに対するわたしの立場を明確にしておきたいと思います。

ワグナーの事績を次の七つの時期に分けることができると思います。

第1期　「南米宣教師」時代
第2期　「教会成長論」時代
第3期　「しるしと不思議の宣教／聖霊の第三の波」時代
第4期　「戦略レベルの霊の戦い」時代
第5期　「とりなしの祈り／預言者の務めの回復」時代
第6期　「脱教派教団主義／使徒的宗教改革」時代
第7期　「王国現在論／王国神学」時代

わたしの立場としては、ピーター・ワグナーの上記事績のうち、第2期までを、キリストの教会全体に対する歴史的に重要な貢献であった、と考えています。
第3期から第4期は、キリストの教会に対する意義ある貢献であると考えていますが、異論を持つ人が相当数いることを認識しています。
第5期については、「とりなしの祈り」に関する部分には価値を認めますが、「預言者の務めの回復」に関する部分については、預言の濫用が日本でもいくつかの教会で問題になっていることから、懸念を持っています。
そうして、第6期については、わたしは、疑念を持っており、第7期については、強い憂慮を持っています。

以上のわたしの立場を明らかにした上で、今後の議論を進めたいと思います。

622 今後の議論にあたり（１） 山谷 - 2004/10/03 22:56 -

この掲示板でこれまで、フルプレテリズム再建主義、パーシャルプレテリズム再建主義と、議論して来たわけですが、いよいよ、本丸と思われる「カリスマ系再建主義」すなわち、王国神学／王国現在論の問題に入って来ました。

再建主義の影響については、リベラルな米国長老教会（PCUSA）が採用しないのはもちろんのこと、保守派の米国プロテスタント改革派教会も反対論を唱え、デイヴィッド・エンゲルズマ博士らが神学専門誌『ウェストミンスター・ジャーナル』において毎号のように反再建主義の論陣を張っています。同じく保守派のスコットランド長老教会（フリーチャーチ）に至っては、再建主義に対して公式な異端宣告を行いました。このように、改革長老教会がカルヴァン神学を適切に保持し、ウェストミンスター信仰告白や大陸系諸信仰告白に忠実であり続ける限りは、＜再建主義が改革長老教会に受容される懸念は皆無である＞と断言してよいでしょう。

こうなってきますと、憂慮されるのは、むしろ、無教派カリスマ系の諸教会だということになります。

無教派カリスマ系の諸教会は、その「脱教派教団主義」（ポスト・デノミネーショナリズム）

のゆえに、特定の神学的伝統に対するコミットメントを欠いており、それがために、神学的土台に弱さがあります。また、教団機構によるカバーリングを欠いているために、不適切な釈義や教義上の逸脱・実践上の逸脱があった場合に、自覚されにくく・是正されにくい、という傾向がありました。こうして、これまで実際に、いくつかの逸脱傾向が見られて来たわけです。それらには、たとえば、ワンネス・ペンテコスタリズム、預言者ブランハムの問題とされた傾向、シェファーディング運動、現代医療の完全否定、九位一体論、預言の濫用、完全聖化達成者の不死の教義、などがあったわけです。

このような無教派カリスマ系教会が、その「無教派主義」ゆえの根本的弱点を補うためには、可能な選択肢として、（１）新教団を創設する、（２）単立教会連合を形成する、（３）既存の教団に加入する、（４）新たなカバーリング機構としての「新使徒団」を設立する、という四つが考えられるわけです。

（１）については、カリスマ派ではありませんが、古典的ペンテコステ派の単立諸教会が合同して形成した「アッセンブリーズ・オブ・ゴッド」や「フォースクエア教団」などの例があります。
（２）については、さまざまな単立教会連合がこれまでに設立されて来ており、日本の聖霊派による「リバイバル同盟」も、このカテゴリーに入るでしょう。
（３）については、東方正教会に帰正した無教派カリスマ系教会の事例があてはまります。
（４）については、これが目下の問題となっている「使徒的宗教改革」あるいは「使徒と預言者の回復運動」になるわけです。

そうして、憂慮すべきなのは、この「使徒的宗教改革」が、王国神学／王国現在論を世界観的パラダイムとして採用してしまった場合に、それが「カリスマ系再建主義」になってしまう、ということなのです。

改革長老教会でしたら、カルヴァン神学の堅固な土台に根拠した、キリストの王権的支配と一般恩恵との適切な把握による政治神学の伝統がありますから、簡単に再建主義を呑んでしまうようなことはないわけです。

しかし、無教派カリスマ系諸教会の場合は、カルヴァン神学のような堅固な土台が存在しませんし、恩恵論をめぐる長い神学的議論の伝統も欠いていますし、政治神学の伝統についても皆無であるわけです。

では、持っているものは何かというと、それは、強力なカリスマと、爆発的な教会成長によって実証された「有効な実践神学理論」であるわけです。

そうして、この「有効な実践神学理論」に対する自信が、あまりにも強いために、＜実践神学が聖書神学を食い滅ぼす＞あるいは＜実践神学が組織神学を食い滅ぼす＞とでも言うべき事態になってしまっているのではないでしょうか？

黙示録12章5節のいわゆる「３ＭＣ」（多くのキリスト者から構成される男の子）のような無理な釈義がなされているのを見ると、そうした憂慮を抱かざるを得ません。

621 ２チャンネル経由で bbc - 2004/10/02 02:49 -

２ちゃんねる経由でこの掲示板に来ましたが、まぁ、みなさんしっかりがんばってください。このページを閉じたら、再びここを開く可能性は低い。ただいま、ネットサーフィン中でした。失礼。

620 ６０４は富井 bbc - 2004/10/02 02:44 -

604は富井だろう。（笑）

619 オーソドックスなキリスト教の時代は終った bbc - 2004/10/02 02:42 -

昔、私も神学なるものにのめり込もうとしたときがあった。だが、今は関心もない。教会通いもやめた。今は、ユニテリアン的自由主義者になりました。「キリスト教は信じうるか」（八木誠一）を読んだ。あれはよかったです。またニューエイジ系の中にもいいものがある。そういうのをいろいろ味わうと、私はもう古臭い信仰には戻れない。

618 ただのおじさんは再建主義の人？ bbc - 2004/10/02 02:33 -

？

617 ワーグナー一派は危険 通行人 - 2004/09/30 23:44 -

616の山谷さんの意見にほぼ同意します。現代の使徒・預言者などのムーヴメントはきわめて危険であると認識しています。一部の霊的エリートをヨイショするだけの、肉を煽るだけで、これが燃え上がったら凄いことになるでしょう。

616 王国神学と王国現在論 山谷 - 2004/09/29 22:44 -

王国神学と王国現在論の研究メモの続きをアップしました。

「王国神学と王国現在論の研究メモ（続き）」

615 王国現在論と王国神学 山谷 - 2004/09/26 16:26 -

ワグナーの王国現在論については、いまだ不明ですが、関連があると思われる王国神学について、現時点での研究メモをアップしました。お読みくだされば幸いです。

「王国現在論と王国神学についての研究覚え書き」

614 ３）他の信仰の立場について何かを言うときには細心の注意を払うべきこと JOG - 2004/09/26 01:39 -

３）他の信仰の立場について何かを言うときには細心の注意を払うべきことを学ばされています。

そのような姿勢の背景には、古典的な立場、また、修正的な立場のディペンセーション者がＰＤを「反聖書的な教えだ」というケースも存在するでしょうし、ＰＤの立場から、前の立場を「もう時代遅れで、古い。」と切り捨ててしまうケースもあると思います。そこには教会に集う信徒や人々の感情的なうめきがあるかもしれません。日本においてはＰＤはまだあまり知られている概念ではありません。だからこそ、細心の注意を払って正確にのべる努力が必要なのではないかと思わされます。

ＰＤは「一般前説の要素に、カルヴァン／カイパー神学の要素を加味した折衷的なものであるわけです。」と述べられてしまうことに関して、ぜひ、誰のどのような文献からの結論であるかを教えていただけたら幸いだと思います。ＰＤが折衷主義におちいってしまったということが事実なら、古典的立場や修正的立場のクリスチャンはＰＤに心開くことは無いでしょう。しかし、そうではなく、ダーレル・ボークがいうように同じ聖書原則を徹底して研究した結果だとするならば、彼らには建設的な対話。一致への可能性があるのです。

他の信仰の立場に言余するときには細心の注意が必要なんだなと、教えられています。再建主義者は批判されることに対して「再建主義を理解してから批判してほしい。」「批判するなら第一資料に当たって、事実に基づいて（引用などをして）にしてほしい」と述べています。しかし、「ミレニアム」において繰り広げられているディスペンセーションへの批判にたいして、そのような姿勢は見つけられないのです。ディスペンセーションに三つの立場があるということすら何も述べていません。しかし、私たちはそうではなく、他の信仰の立場について言明するときは、きちんとその信仰の立場を理解し、直接文献にあたって、正確に述べる努力をしたいと思います。憶測や推測で他の信仰の立場について言明したりすることは厳に慎むべきだと思います。私はダラス神学校教授、ダーレル・ボーク師の「プログレッシブ・ディスペンセーション」を通して学んだことをおわかちさせていただきました。

613 ２）三つの立場のディスペンセーション主義としての共通性 JOG - 2004/09/26 01:39 -

２）三つの立場のディスペンセーション主義としての共通性

しかし、これだけの内容の違いが出てくるのですから、地位教会や信徒の立場では様々な混乱が出てくることが予想されます。その点がＰＤの著書にあたると感じさせられます。立場の違いによってお互いを攻撃しあうことをさけようとしているようです。同じダラス神学校の中で、違った立場の教授が存在している状況だそうです。神学校として、や、教団として、この立場が正しいと権威づけるのではなく、それぞれの聖書研究の中で自主選択してゆくという状況だそうです。

そして三つの立場に共通する項目として、１）聖書の権威を全面的に認めること。２）それぞれの時代の社会組織、構造というものを認めること、３）教会とイスラエルを区別すること、４）普遍的教会の強調をもつこと、５）聖書預言を大切にすること、６）近い将来の再臨を信じていること、７）黙示録を歴史的に理解し、イスラエルの国家的祝福を神の祝福の一部と考える、前千年王国説に立つ。などを挙げています。

また、三つの立場の違いがおきた原因に関しては「伝統的に私たちは絶えず聖書に忠実でありたいということなのです。・・・これらの違いがあるということは聖書の主張に忠実であらんとしていることのあらわれなのです。どのひとつの世代であっても・・・誰であっても・・・完全な神学の体系をもったということは許されません。・・・どの時代においても神学体系を究極的なものとして考えてはなりません。」と主張しています。

すなわち、立場の違いはあっても、共通する聖書解釈の原則共有し、常に御言葉にむきあって、聖書に帰ってゆこうという姿勢を堅持していると思われるのです。

612 １）ＰＤと他のディスペンセーション神学との違い JOG - 2004/09/26 01:38 -

私に発言する資格などございませんが、途中で終わるわけにも行きませんので、どうかご忍耐くだされればとお願いいたします。

１）ＰＤと他のディスペンセーション神学との違い

＞もちろん、これは、カルヴァン／カイパーの発案というよりは、エフェソ書やコロサイ書の綿密な釈義から当然導き出されるはずの概念でありましょう。

二書だけの釈義ではなく、聖書全体の御言葉の総合的な研究によって引き出されてきた教理だと思うのです。ディスペンセーション主義とは（その立場にたつ人の著書の特徴といってよいかもしれませんが）いくつかの御言葉や、いくつかの書に～と書いてあるから、とか、～という神学者が～と主張しているからとか、そのような部分的な要素から教理を形成することを極力さける特徴があると思うのです。ひとつのテーマを論述するために、聖書全体から御言葉を引き出して、比較検討を加えることがディスペンセーション主義の特徴だと思うのです。

＞一般前説の場合は、「現経綸においてキリストが全宇宙を王権的に支配している」という観点がなく、むしろ、＜教会時代＝異邦人の時＞が割り込んできたことによって、キリストの王座への着座が遅延している、という見方をしてきたのであろうと思います。

上記に書かれていることが古典的立場、修正的立場がとってきた「教会挿入説」「王国延期説」というものです。ＰＤはこの二つの説を否定しました。しかし、それは、いくつかの書を釈義したり、または、どこかの高名な神学者の意見を取りいれたからではありません。

　「キリストの王権的支配」という概念自体は古典的立場にも、修正的立場にも述べられているのです。しかし、それは来るべき「ダビデに約束された、地上におけるメシヤの千年王国」においての「キリストの王権的支配」でした。すなわち、古典的・修正的立場では、教会と千年王国は別の経綸であり、無関係であり非連続だと理解していたのです。

しかし、聖書全体を研究する中で、「非連続」という概念自体ではどうしても説明のつかない要素にＰＤは取り組んだのです。そして出た結果が「教会」と「千年王国」は部分的に連続している、漸進的に経綸は移り変わってゆくという概念です。来るべき「千年王国」の現在の現れとしてキリストは「教会」を通して「王権的支配」を現しておられるという理解です。

ＰＤは「キリストの王権的支配」という概念を、臓器移植をするように他の神学から取り込んだのではなく、聖書全体を理解する枠組みに修正を加えたと思われるのです。

ですから現経綸をキリストがどのように支配しているかということに対して、「律法」か「一般恩恵」かということではなく、来るべき「千年王国」における「キリストの王権的支配」が現経綸において現されていくわけですから、そのような過去のものではありえないわけです。今後もそのような議論はでてこないと予測されます。

611 PDとワグナー 山谷 - 2004/09/25 23:41 -

キリストの王権的支配という概念は、カルヴァン／カイパー神学の特徴的な考え方であると思います。もちろん、これは、カルヴァン／カイパーの発案というよりは、エフェソ書やコロサイ書の綿密な釈義から当然導き出されるはずの概念でありましょう。

一般前説の場合は、「現経綸においてキリストが全宇宙を王権的に支配している」という観点がなく、むしろ、＜教会時代＝異邦人の時＞が割り込んできたことによって、キリストの王座への着座が遅延している、という見方をしてきたのであろうと思います。

ＰＤは、このような旧来の一般前説の見方をやめて、キリスト高挙を、ダビデの王座への着座である、と解釈することによって、遅延ではなく、現経綸におけるキリストの王権的支配を言うことができるようになったわけです。

ただし、その王権的支配が、一般恩恵を通して行われるのか、天使的諸力を通して行われるのか、司法律法を通して行われるのか、ＰＤではいまだ不明瞭であると思います。

そこで、ダビデの王座からの支配の＜部分的な＞実現、ということを言うのでありましょう。

「現経綸におけるキリストの王権的支配を主張する」という意味では、ＰＤは、一般前説の要素に、カルヴァン／カイパー神学の要素を加味した折衷的なものであるわけです。それゆえに、「ＰＤは、ディスペンセーション主義と契約神学の折衷案である」というような評価も、なされているのでありましょう。

もちろん、これは、＜新約聖書のより綿密な釈義に基づいたパラダイムに接近した＞ということであるわけですが・・・

わたしの感じでは、ＰＤは、クルマンの救済史神学に非常に接近して来ていると思います。おそらく、ＰＤが今後、打破された悪鬼的天使的諸力である国家権力、という概念を採用することになれば、もうほとんど、救済史神学と同一のものになってしまうでありましょう。

このような仕方で、リベラルな神学と福音派の神学が、パラダイム的な一致を見る、というのは、夢のような感じもしますが。

ワグナーの問題は、彼の説く「王国現在論」の内容を、現在研究中ですので、もう少し詳しいことがわかってから、再評価したいと思っています。

おそらくは、アナコンディアの激しい祈りのスタイルが、＜人々の目の覆いを取り去って、キリストの福音の栄光を見ることが出来るようにさせる＞のに非常に有効であったことから、その祈りによって、さらに、地域や国家を支配する諸霊を打倒し・征服し・キリスト者がそれらになり代わって、「王の系統を引く祭司」（ペテロ前書）としての立場から、司法律法によって諸国家・諸政府・諸文化を「統治する」ことすらも、現経綸において可能である、と確信するに至ったのでありましょう。

こうなりますと、＜現経綸をどう理解するか＞という、パラダイム的な問題の相違、ということになるでありましょう。

610 ２．ピーター・ワグナーがなぜ再建主義者の亜流になったか？ JOG - 2004/09/24 00:02 -

２．ピーター・ワグナーがなぜ再建主義者の亜流になったか？

三つの理由が書かれていますが、（2）「悪鬼的天使的諸力が操作する国家と社会を、キリスト者が「霊の戦いの祈り」によって征服し、」と書かれていますのは普通に「霊の戦い」の実践者が（意識しているか、無意識にかは別として）普通に目標としているところだと思います。

また（３）の「＜悪鬼的天使的諸力がキリストの十字架によって武装解除されて・・・・という点を見落としてしまったのか？」という点は、普通の聖霊派の視点では非常に受け入れがた

い概念だと思います。

理由を以下に述べます。

　聖霊派にも三つの立場があります。ワグナーは「第三の波」と名づけましたが1990年代ごろに出現した立場です。古典的ペンテコステ派は今世紀の初頭から発生しています。個人レベルの「霊の戦い」は古典的ペンテコステにとっては当時から現代において常に日常茶飯事です。そして神学よりも体験が重視されるとう特徴を持っています。また、「神に従うか、悪魔に従うか」「御言葉に従うか、この世の流れに従うか」「信仰か、不信仰か」「祝福か、呪いか」といった二者選択的な強い姿勢を持っています。そのような姿勢はある意味再建主義の主張になじみやすいのです。

　さて、この個人レベルの霊の戦いにおいて体験されてきた、語られ、また、文章でも描かれてきた「悪霊」の姿は実に生生しいものです。けっして一点の妥協も、関わりもなく、立ち向かい、叱り付け、縛り付け、すべてを断ち切り、追い出すべきものです。

　さてワグナーはその古典的ペンテコステにおいて日常茶飯だった「霊の戦い」を「国家レベル」「世界レベル」にまで拡大し、広めたという特徴があると思います。
　そのきっかけはアルゼンチン・リバリストであるカルロス・アナコンディアの伝道スタイルに触れたことです。それまで方法論的な教会成長論が専門だったワグナーは、クルセードの開始に至るまでの数ヶ月が徹底して、その地域の悪霊を縛り、追い出す祈りに費やされ、クルセードの最中にも徹底して悪霊をしかりつけるスタイルのミニストリーに病の癒し、悪霊からの解放とともに大規模な回心者が起こされるという結果を目の当たりにしてそれについて研究をはじめたのです。そして、「個人レベル」の「霊の戦い」から、「地域レベル」「都市レベル」「国家レベル」「世界レベル」へと彼の研究対象は発展していったのです。

　しかし、「範囲を広めていった」という特徴に対して、その内容にに関しては「個人レベル」と比べて質的な違いは少ないと思うのです。

ですから、「霊の戦い」はあくまでも「戦い」であり、目標は「勝利」であり、「悪霊（山谷様の表現を借りますと、悪鬼的天使的勢力）」はあくまでも「敵」であり「征服される」べきものなのです。

　この世の法律をクリスチャンが正当化するための概念的な道具として使うという発想は無いと思いますし、相容れない・非常に受け入れがたい思想だと思うのです。

しかし「霊の戦い」の方向性もその後変わって来ています。チャールズ・クラフトは「悪霊と人間の罪」の関係を「ねずみとなまごみ」の関係にたとえ、ねずみを叩こうとするよりも、なまごみを処理すること、すなわち、罪の問題を、神への悔い改めによって処理することによって「霊の戦い」は容易に勝利できるとの主張がなされています。へと移り変わってゆきます。

「悪霊」に主な焦点を置くのではなく、たとえどんなに悪霊の影響の下にあったとしても「人間の責任・罪」に焦点を置いてゆくことを通して、「霊の戦い」は勝利を得られるということです。

　ワグナーの強調点も「過去において国家が犯した罪を、現代の私たちが同一化して悔い改めの祈りをする」「国家的な偶像崇拝の集団的悔い改め」ダニエルの祈りの実践がなされています。また、福音派の中でもニール・アンダーソンが同様の主張と悔い改めの祈りのステップの方法を提示し広がりを見せています。

609 １）ＰＤがカイパー神学を取り入れているか？ JOG - 2004/09/24 00:02 -

山谷様、私は間借り人にしか過ぎないものでありますが、山谷様のレスポンス第三号を拝読させていただきまして、またも恥をしのんで発言させていただきたく願います。即刻削除されても当然と承知しておりますが、なにとぞ、お許しをお願い申し上げます。

１）ＰＤがカイパー神学を取り入れているか？

私が本で学んでいますことによりますと、ＰＤはあくまでもディスペンセーションナリズムの姿勢を堅持しているとのことでございます。すなわちその姿勢とは、どんな高名な神学者よりも聖書の権威を重んじ、神学や信条よりも、聖書本文の優位性を認識し、神学や信条を絶対化せず、たえず、神学の側を聖書本文にあわせてゆくという主張です。たしかにＰＤ出現の背景には福音主義神学の相互交流があったとは言われていますが、単に、他の神学概念を取り入れるという姿勢ではもはや、ディスペンセーション主義とはいえないと思います。ＰＤの文献によっても、ＰＤの立場は、聖書本文の研究からきていると主張されています。

山谷様が「ＰＤがカイパー神学を取り入れている」との発言は、どのような根拠をもって、誰の、またはどのような文献からのご発言なのでしょうか？

私も専門家ではありませんので、本から学んだ知識に過ぎませんが次のように理解しております。ディスペンセーション神学にはクラシカル（古典的）ディスペンセーション、リヴァイズド（修正）ディペンセーション、プログレッシブ（漸進的）ディスペンセーションと三つの立場がありますが、ＰＤの特徴的なところはその名が示す通りに漸進的（プログレッシブ）なところ、すなわち、ひとつの経綸から次の経綸への移行が漸進的になされていくというところだと思います。

　前の二つの立場におきましてはイスラエルと教会の区別は明確であり、水と油のような関係です。ダビデとの契約においてのイスラエル国家の回復と神の王権は、千年王国において成就され、教会との関係は無関係で、非連続という理解でした。
　しかし、ＰＤにおいてはダビデとの契約の約束が教会において部分的に成就している。また、次の経綸である千年王国において成就すべき神の契約が、部分的に教会において開始されて、漸進的に拡大しているという理解です。ひとつの経綸から次の経綸への移行がいつなのかわからないほど、重なり合い、相互補完し、「漸進的＝プログレッシブ」であるという主張です。
　ですからカイパーの「キリストの王権的支配」と似ているかもしれませんが同じものではなく、決して「取り入れた」ものではなく、あくまでも聖書本文から引き出されたものと理解しています。

また「キリストの王権的支配」は一般恩恵というよりも、「来るべき終末の現在の現れとしての教会」を通して世に現され、教会は世に仕えてゆく、祝福してゆく、との意味が書かれており、「律法」や「自然法」に従うというよりも、エレミヤ３１：３１やエゼキエル３４：２３に書かれているような「新しい契約」「神が心に律法を書き記す」すなわち、聖霊による支配、恵みによる支配、というところにポイントがおかれているように感じました。

608 プログレッシブ・ディスペンセーショナリズムと
ピーター・ワグナーの問題 山谷 - 2004/09/23 14:47 -

プログレッシブ・ディスペンセーショナリズムとピーター・ワグナーの問題を考える小論を作成しました。お読みくだされば、幸いです。

「レスポンス　第三号」

607 山谷様へ JOG - 2004/09/21 23:31 -

山谷様、悔い改めさせていただきました、ＪＯＧでございます。
もう、発言はせぬともうしましたが、あなた様の先のご発言をおよみし、今ひとたびの、最後の発言をしたい希望がわいてまいりました。どうかおゆるしくださいませ。

山谷様が440において

＞微妙なところが、（９）です。＜神の救いが、キリスト高挙によって打破され従属させられた天使的諸力の仲介を経て、文化・社会・政治の領域にも及ぶ＞と見るのであれば、「似ている」ということになります。しかし、＜神の救いが、キリスト再臨の前に、天使的諸力の仲介を経ずに、無媒介的に、文化・社会・政治の領域にも及ぶ＞と見るのであれば、「似ていない」ということになり、むしろ、「再建主義に近似している」ということになります。

私はダーレル・ボークの日本語訳文献を持っておりますが、「天使的諸力の仲介」との概念はまったくでてまいりません。したがって、、「再建主義に近似している」ということになるのではと存じます。

また、ピーター・ワグナーの「霊の戦い」の主張は、「天使的諸力の仲介」と言う概念とは相容れないルシファーを頂点とする「悪霊」に対する主に祈りと御言葉の権威を用いた戦いを主張しております。それは主に福音宣教のためで、また、犯罪の防止や国家的な偶像崇拝の力からの解放をうたっていますので、山谷様が主張する「いつ悪鬼化するかわからない存在が国家権力を担っている」といった概念とは相容れないものだと私は理解しております。

それでは再三、もう発言は止めますといっておきながら、乱文、乱筆のご無礼をおゆるしくださいませ。

606 楽観的前千年期再臨説の適切な分類先 山谷 - 2004/09/21 22:00 -

神学については「素人」を自認しているわたしとしては、「山谷神学」などと呼ばれるのは、まったくもって恥ずかしい限りです。素人と言うわけは、ギリシャ語もラテン語もヘブル語も初級文法しか学んでいませんし、残念ながら、アウグスティヌスの『神の国』、トマスの『神学大全』、カルヴァンの『キリスト教綱要』、バルトの『教会教義学』という神学の四大基本文献すら、いまだ、読破できていないからです。

そうして、持論としてくどくどと説明申し上げてきたことも、ひとつとしてわたしのオリジナルの発想や聖書解釈は存在せず、どれひとつとっても、偉大な先人たちの緻密な聖書釈義に基づく神学的議論からアイデアを頂戴したものばかりであることを、いまいちど、申し添えておきます。

さて、「楽観的前千年期再臨説」という立場を適切に表現する名称があるとしたら、おそらくは、リベラル神学の方面からなら「救済史神学」、福音派神学の方面からなら「プログレッシブ・ディスペンセーショナリズム」ということになるのではないかと思います。

「プログレッシブ・ディスペンセーショナリズム」は、いわゆる通常の前千年期再臨説に、カルヴァン神学の「キリストの王権的支配」の概念を合体させた感じのものです。また、救済史

神学の重要な時間概念である<すでに・しかし・いまだ>という中間時の時制も、プログレッシブ・ディスペンセーショナリズムには、きちんと入っていると思います。

しかし、プログレッシブ・ディスペンセーショナリズムには、（おそらく）「天使的諸力としての国家権力」という概念が組み込まれてはいないだろうと思います。このあたりは、まだ、プログレッシブ・ディスペンセーショナリズムの神学書に直接あたっていないので、確認できているわけではありませんが。

そこで、この掲示板で持論としてこれまで述べてきたわたしの立場を表現するとしたら、それは、「摂理論的プログレッシブ・ディスペンセーショナリズム」というようなものになるでしょう。

この場合の摂理論というのは、組織神学において天使論・悪鬼論・国家論を扱う部門としての「摂理論」です。

「武装解除された悪鬼的天使的諸力としての国家権力」という概念は、フラー神学校世界宣教学部教授のピーター・ワグナーによって、一連の「戦略的霊の戦い」の著作のひとつで、オスカー・クルマンの『キリストと時』第三部・第三章を直接引用するかたちで紹介されています。ですので、この概念は、日本でも「聖霊派」のひとたちには、マルコーシュ・パブリケーションの翻訳書を通じてすでに知られているであろうと思います。ちなみに、マルコーシュの訳書には、岩波書店から出ている前田護郎訳の『キリストと時』がそのまま使用されています。

日本の神学界においては、「武装解除された悪鬼的天使的諸力としての国家権力」という概念は、バルトの『義認と法』を紹介するというかたちで、1940年代初頭に、当時の５～６人の日本人神学者たちにより紹介されています。『義認と法』がドイツで出版されたのが1938年ですから、その二年後にはもう、日本でも知られていたことになります。
ただし、バルトの意図に反して、日本では、故意に「国家の悪鬼化」という視点がカットされ、「キリスト頭首権のエージェントとしての国家」という視点だけが紹介されたに過ぎませんでした。これは、当時の政府による検閲を恐れてのことでありましょう。

オスカー・クルマンが分析した<中間時の中間領域>としての「武装解除された悪鬼的天使的諸力」の概念の重要性を、現代の聖霊派の「戦略レベルの霊の戦い」の文脈において再発見したピーター・ワグナーは、その後、残念ながら、再建主義の亜流である「キングダム・ナウ」理論の推進者となって、現在活動中のようです。

今後の課題としては、「キリストの王権的支配は、現経綸において、天使的諸力の仲介において、<自然法>を通して行われるべきなのか、あるいは、<司法律法>を通して行われるべきなのか」という問題点を、洗い出して行きたいと思っています。

604 ただのおじさんに同意 見物人 - 2004/09/21 11:16 -

603に同意。
山谷大尉殿、すでに言語明瞭・意味不明に落ちています。
大尉の頭ではそれなりにスジが通っているのでしょうが。

603 私は山谷師の発言スタンスには異議がある ただのおじさん - 2004/09/21 07:42 -

リスペクトをはらうとは、相手を見下さないということ。

詭弁を労さないこと。
私は他の人と違って、山谷師の発言スタンスに疑問を持ったので、発言の信憑性を疑ったのです。そしてその疑いは本当でした。

602 喧嘩両成敗 ただのおじさん - 2004/09/21 07:25 -

あまり良い発言スタンスではないと思うけどね。お互い。
掲示板での意見のずれを山ほど体験している人間としては、あの発言スタンスでは意見がずれるのは当然だと思う。
双方に（片方だけではない）相手をリスペクトする気がなければ、掲示板のやりとりなど成立しないのは当然。
ここまで話がこじれたのは片方だけの責任ではないと考えるべきだね。
私はガチガチの根本主義なので、エキュメニカルの人から滅茶苦茶言われることがあります。どうしてあそこまで滅茶苦茶言うんだろうというくらいにね。JOGさんが悔い改めるならば、私は私と話をしたエキュメニカルの人のほとんどにそれをして欲しいくらいですよ。JOGさんくらいの発言は、私がエキュメニカルの人に言われた言われ方からすれば、何のことありません。それくらい、エキュメニカルの人の根本主義者に対する拒絶感は強いんです。
また私は、掲示板での対話の仕方も研究したので、偽善的な態度（これもエキュメニカルの人に多い）などすぐ見抜けます。私はここでもそれを見かけたので嫌になったのです。
たかが掲示板と思わないでください。言葉だけでも偽善性は見抜けます。

601 了解しました。すみませんでした。 JOG - 2004/09/21 00:44 -

了解しました。つい、行き過ぎた発言をしてしまいました。
自分でも感じながら、ついつい行き過ぎてしましました。
山谷様、また、この掲示板をごらんになるすべての皆様、
また、主の前に悔い改めます。

くすり屋様、ごしてきをありがとうございました。

すみませんでした。

また普通の「前千年王国説」の立場にたつ皆様にも、私の行き過ぎた発言によって私と同類にみられてしまうような迷惑をかけました。お赦しください。

これにて、私は、すべての発言に関して、この掲示板での発言を取めさせていただきます。

本当にすみませんでした。

600 JOG様 くすり屋 - 2004/09/21 00:36 -

ここは山谷氏の開設した掲示板です。われわれはいうなれば間借り人に過ぎません。どういった書き込みを望もうがそれは山谷氏の自由裁量ですし、われわれには何ら要求をする根拠がありません。また、いくらネット上のバーチャル空間とはいえ、世の中一般で言われているマナー、クリスチャンとして望まれるべきマナーを逸脱する事が認められてしかるべき場でもありません。面と向かって言う事がはばかられるような内容、表現はネット上でも遠慮すべきが最低限のルールと心得ます。場を借りて発言しながらその場の提供者を「あんた」呼ばわりするのは明らかに行き過ではありませんか？

ちなみに私は再建主義にも山谷神学にも組しない、カルヴァン系教派のクリスチャンですが、山谷氏の発言スタンスには敬意を表したいと思います。

599 分断 JOG - 2004/09/20 23:44 -

フルプレテリストとパーシャルプレテリストを分断したのは、
自分の戦果だとうそぶいている。本当に真っ赤なうそだ。

富井氏は分断の結果が出る前から、フルのことを異端と散々と指摘していた。しかし、フルの側からは、反論が非常にゆっくりだったんだ。それは、富井氏が神学議論を一番の働きにおいていることに対して、フルの側では、一番の働きは牧会であり、伝道であったので、反論する時間をおしんでいたんだ。

だから、分断という結果がでたのは、時間の経過とともに当然のなりゆきだった。また、フルのホームページを見てみると、アメリカのフルもパーシャルから異端扱いされている様子だ。

そんなことも知らないで、自分の「戦果」だなんて誇らしげに書いているなんて、信じられない人だ。

また、あなたが主張する「悲観的前千年王国説」と「楽観的前千年王国説」なども、「前千年王国説」二つに分断するようなものだと思うよ。

でもあなたがいう「楽観的前千年王国説」の信仰者って日本に何人くらいいるの？

598 ただし JOG - 2004/09/20 22:29 -

「悲観的前千年王国説」と「楽観的前千年王国説」ってのはあまりにもあんたの自分勝手すぎるし、まぎらわしいので、ほかの名前を考えてね。

597 なんとかのひとつ覚え JOG - 2004/09/20 22:27 -

なんとかのひとつ覚えみたいに

＞ディベリウス、デーン、シュリーア、バルト、クルマン、ベルコフ、ケアードです。

なんて繰り返すのはもうやめてね。その名前もう覚えるくらいに読んだから。

いいかげんに神学者の名前を羅列することが論議することじゃないって気づいてね。

あんたが専門の神学者じゃないってことぐらい書いてること読めばわかるけど、その奇妙な主張に適当な名前がないので「山谷神学」って呼んだんだよ。きにいらなけりゃ、ほかに名前を考えてね。

596 勝手な分類 JOG - 2004/09/20 22:15 -

前千年王国説に対して、「悲観的前千年王国説」と「楽観的前千年王国説」自分勝手に分類してるんだね。

「楽観的前千年王国説」って自分が主張している奇妙な「山谷神学」のことなんでしょ？あほらし。

だからあんたは、普通の「前千年王国説」のことを「悲観的前千年王国説」ってレッテル貼って再建主義と同じ批判をしてるだけじゃん。

しかも、あんたがいう「楽観的」って内容は、エキュメニカルも含んだ世界の動きも含んでて、それを阻止しようとする人に「陰謀論」なんてレッテルをはってるんでしょ。

最初、けいじさんや、ただのおじさんがなんでカトリックとエキュメニカルにこだわるのわからなかったけど、これでおれもわかった。

やっぱり、カトリックとエキュメニカルを他の掲示板に移そうともくろむあんたの主張はおかしいわ。

この掲示板に参加する前に、ここは「カトリックとエキュメニカルに賛成しなければ「陰謀論」とレッテルを貼られ、かつ、通常の前千年王国説に対して悲観的千年王国説で問題の多い教えだから、山谷神学を信望して楽観的千年王国説に変わる人が再建主義をウォッチングする掲示板」ってぐらいの名前にしてもらわないと、公共広告機構にひっかかるんじゃないかな〜。

595 いちいち JOG - 2004/09/20 22:01 -

いちいち自分の信望する神学者の名前を出さなくても、
福音主義においても「宣教」の概念を「ケリュグマ」と「社会的実践」の両者を意味し、実践することはなされています。

「社会的実践」なき「ケリュグマ」は不十分だったでしょう。
しかし、「ケリュグマ」なき「社会的実践」は共産党でもできることです。

594 アミレへの反論文 JOG - 2004/09/20 09:20 -

再建主義のホームページより引用します。

==========
（3）無千年王国説：世界が終わる前に、地上において千年王国と呼ばれる福音と義と平和の支配する期間は存在せず、歴史の中では、義と不義、キリストの支配とサタンの支配とはどちらも平行して発展するとします。キリストの再臨において、完成された神の国が到来し、サタンの支配は覆されるという点において他の説と同じですが、歴史の中においてクリスチャンの働きがサタンの支配を圧倒していくということはない、と考えるため、この説は前千年王国説と同じく『悲観的終末論』なのです。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
このように山谷氏の再建主義認識はきわめて不十分です。
彼は再建主義はアミレは攻撃しないと書いています。彼の関心が再建主義にはなく自分の独自の神学構築にあるということの証明です。

私はこのような再建主義の主張に「律法主義的信仰」という面を指摘しておきましょう。それが「再建主義ウォッチング」という題名がついたこの掲示板にきた私のそもそもの目的だったからです。

593 本当の論点 JOG - 2004/09/20 09:12 -

本当の論点はあなたがレスポンスで書いたようなごちゃごちゃした論議に入らなければ、再建主義についての意見交換ができないという点です。

題名においては「再建主義についての意見交換」とうたわれていることが、二次的、三次的、四次的的なことがらになってしまっているのです。

これが本当に論点です、けいじさんも573において意見をされていることです。あなたはこれについてまったく返答も考慮もしていない。まさに無視しているのです。

592 甘い JOG - 2004/09/20 07:06 -

再建主義者が攻撃するのがプリミレだけで、アミレは攻撃していない？

甘いな！！

アミレを攻撃していますよ。

自分の奇妙な神学の構築に忙しくて、再建主義の主張など、あまり関心が無いことの証拠だな。

591 論外 JOG - 2004/09/20 06:53 -

どうしても奇妙神学の神学論争に引きずり込もうとする姿勢にはもう論外。私はこの件にかんしてはもう発言しないと宣言しました。

・御言葉を引用して論議するのではなく、神学者の名前を羅列するとことが論議だと思っている。

・相手の発言を、巧妙に自分の論理に摩り替えて、かってな論述を進めている。

・「十全」霊感説という福音主義神学にとっての生命線である概念をかってにとりさっていながら「初歩的」とうそぶいてかわしている不誠実さ。５７０でただのおじさんさんがあきれたとおりです。あなたはただ無視を続けて、自分のかってな論理をすすめているだけです。

論外ですね。

590 レスポンス第二号 山谷 - 2004/09/19 23:20 -

論点を整理するため、「レスポンス第二号」をアップしました。お読みくだされば幸いです。

「レスポンス第二号」

589 正々堂々と JOG - 2004/09/18 10:09 -

非神話化というプロセスを省略することによって、下女として使用できるって表現も巧妙ですね〜。

下女がいなけりゃ、勝てないなんて、これ以上の敗北宣言はないですよ。

下女なんて使わないで、正々堂々と「聖書」で戦ってほしいですね。

588 補足 JOG - 2004/09/18 09:58 -

＞上記の発言に関しては、一言もレスがなく無視されたのです。

これは管理人からレスがなかったと言う意味です。

587 無視 JOG - 2004/09/18 09:55 -

＞これであったら、「前千年期説という悲観論で人生を棒に振るな。楽観的な再建主義によって、キリストと共に勝利者となろう」という再建主義の主張に対しては、何ら、反論にはならなくなってしまうのです。

これこそ再建主義に対しての敗北宣言です。

「前千年期説が悲観的であるはずがありません。」

「再建主義でなければ楽観的になれないというその主張の中に巧妙な律法主義が入り込んでいる。」

という意見を表現したくて、この掲示板に来たのです。

そして、それができなかったのです。

山谷神学に対してのレスは必要以上に、こちらが望んでいないことまで、長々と書かれているのに、上記の発言に関しては、一言もレスがなく無視されたのです。

これで、「再建主義ウォッチング」という題名をつけることができますか？

586 追加３ JOG - 2004/09/18 09:31 -

そんな「脚注」といった色眼鏡が通して聖書を読まなくても、
「聖書」を解説するのは「聖書」が十分に理解させてくれます。

参考図書がいらないと言っているのではありません。
しかし、福音主義の立場の信仰者は通常の福音主義神学の立場から
書かれた参考図書がたくさんあるのに、あえて、カトリックや十全霊感説にたたない神学者の書物を勧めるところの異常性を指摘しているのです。

585 追加２ JOG - 2004/09/18 07:52 -

＞カトリック訳の聖書を勧めることについても、長々と書かれていますが、全く論旨がはずれています。普通のプロテスタント信徒からいうと、「なんで、普通の聖書で主張できないの？」というだけの話です。

それと、あなたが「読め」といわれたところは「本文」ではなく、「脚注」でしょ？

「脚注」ってくせものですよ。聖書本文ではないのに、聖書と同じ本の同じページに書かれていたりするから、聖書本文と同じ重みのある言葉だと思って、誤解しやすいんですよ。

584 追加 JOG - 2004/09/18 07:46 -

山谷神学の存在によって、
「再建主義はそんなにおかしい教えではなかったんだ。」

また、山谷神学と再建主義の二つしか選択肢がないのなら、
再建主義を学んでみようかな？と思う人が増えると思いますよ。

と

583 ３度目のお願い JOG - 2004/09/18 07:23 -

３度目のお願いをしましょう。
掲示板の名前は変えたほうがいいと思いますよ。

なぜならば、581、582の主張において明らかであるように、選択肢は再建主義か山谷神学かの二つしかないように主張されているからです。

このような主張をされてしまうと、再建主義を選択せざるえません。
非再建主義の立場にたつためには「言語十全霊感説」の立場を捨て、新正統派の神学者の意見を受け入れ、カトリックを受け入れないといけないと主張されるならば、というていそんなことはできないということです。

そして、通常の一般的なプロテスタントの信仰については「悲観的」と批判されているのですから、再建主義の主張と何ら変わりません。

カトリック訳の聖書を勧めることについても、長々と書かれていますが、全く論旨がはずれています。普通のプロテスタント信徒からいうと、「なんで、普通の聖書で主張できないの？」というだけの話です。

582 聖書の翻訳について 山谷 - 2004/09/17 23:58 -

なお、フランシスコ会訳聖書研究所の新約聖書をプロテスタントに読むようにすすめることが「罪」であるという考え方の背後には、＜特定の国語聖書のみが真の権威を持つ＞という、カトリックのトリエント公会議に似た聖書観が存在しているように思われますが、どうでしょうか？

わたしは、聖書は原典において逐語的に霊感されている、と考えています。そうして、聖書のみが、キリスト者の信仰と実行に関する唯一の規範であると考えています。

そうして、原典は、現時点において、地球上に存在しない以上、諸写本に対する批判的本文研究によって＜マジョリティーテキスト＞を構成することが、非常に重要であると考えています。

さらに、翻訳された聖書は、原典とは同等の権威を持ち得ないのですから、ある特定の翻訳が他の翻訳に優位するとか、ある特定の翻訳が原典と等しい権威を有する、ということは、ありえない、と考えています。なぜなら、ヘブル語にしてもアラム語にしても古典ギリシャ語にしても、言語としてはいまだ完全に解明されているわけではない、未知の部分を持った「古代語」であるからです。

聖書学の水準については、第二バチカン公会議におけるカトリックの大転換によって、カトリックはプロテスタントの聖書学の成果を積極的に取り入れ、その結果、現時点において、プロテスタントの聖書学とカトリックの聖書学は、学問的に同水準にあり、教派を超えた共同研究も盛んに行われています。このゆえに、共同翻訳である「新共同訳聖書」というプロジェクトが実現したわけです。

このプロジェクトの実現は、トリエント公会議・近代主義誤謬表・第一バチカン公会議のカトリックの立場から見れば、「アナテマ」されるべきものでしょう。それが現代において可能になったのは、キリストの教会が、常に、たえず、＜教会改革＞＜宗教改革＞＜国政改革＞によって、刷新され続けているからです。

わたしの属する教団では、公用聖書として新共同訳聖書を使用しています。もちろん、プロテスタントですから、旧約外典を含まない版を使用しています。これを「反キリストだ」と言うファンダメンタリストがいるとしたら、その人はおそらく、欽定訳聖書の最初の版には旧約外典が含まれていたこと、また、欽定訳が改訂されたときに、旧約外典も改訂された、ということを、知らないのでありましょう。

しかし、新共同訳聖書を私的な研究で使用し、また、ひとにフランシスコ会訳聖書を読んでみるようすすめたら、そのひとはもはや、わたしはもはや、プロテスタントではない、と批判されることになるのだろうか？

そんなことはないでしょう。なぜなら、トリエント公会議は、「洗礼に自然水を使用する必要はない、と言う者は、呪われよ」と宣言しているからです。

さらにまた、わたしの属する教団は、旧約外典を正典から除外しています。ですので、わたしとしては、個人的に20数年前、聖公会出版から出ている『アポクリファ』を数度通読したことがある程度です。それ以来、私的にも公的にも、読んだことは、ありません。

では、カルタゴ地方公会議は、間違っていたのだろうか？

わたしは、公会議は、正しい判断をすることもあるし、間違った判断をすることもあると考えています。

そうして、「公会議も間違うことがある」と、ライプチヒでの公開討論で発言したがゆえに、マルチン・ルターはカトリックから破門されたわけです。

581 五度目のお願い 山谷 - 2004/09/17 23:58 -

この掲示板の趣旨は、あくまで再建主義ウォッチングであるわけです。

再建主義に対してわたしは、＜新約聖書神学の世界観的パラダイムに基づく三位一体的統治の概念図＞（三項図式の世界観）を提示して、反論を行って来ました。

これに対して、「悪鬼的天使的諸力としての国家権力論」と「キリスト者の世界的連帯による監視と預言者的声」について、質問と疑問が提出されました。

この二つの概念は、＜新約聖書神学の世界観的パラダイムに基づく三位一体的統治の概念図＞（三項図式の世界観）において、重要な鍵となる概念である、とわたしは考えています。

なぜなら、もし、（１）国家権力は天使的諸力ではなく、単に人間の作った制度でしかないのであり、かつ、（２）キリスト者は世界的連帯による預言者的声を挙げるだけでは不十分であって、キリスト者が王権的支配をもって世界を統治しなければならず、しかも、（３）中間領域と一般恩恵が存在しないのであるなら、わたしたちが選択すべき答えは「再建主義しかない」ということになるであろうからです。

ですから、みなさまから繰り返される、「悪鬼的天使的諸力としての国家権力論」と「キリスト者の世界的連帯による監視と預言者的声」についての疑問・質問について、わたしも、何度でも繰り返して、自分の考えを説明してきたわけです。

そうして、「キリスト者の世界的連帯による監視と預言者的声」の具体例として、わたしは、世界教会協議会と、世界福音同盟と、第二バチカン公会議以降のローマカトリックによる、社会正義の問題への積極的取り組みとを指摘し、これこそが「国家・社会・教会の一体化による悪鬼化を阻止するところの＜不法の力を抑止するもの＞である」と、考えているわけです。

＜不法の力＞とは、まさに、キリスト頭首権による三位一体的統治の法に、反対する力です。それは、憲法をないがしろにし、国際法をないがしろにし、信教・言論・集会・出版・結社・学問の諸自由をないがしろにし、人道と人権をないがしろにする、＜不法の力＞であるわけです。

ところが、＜キリスト者の世界的連帯による監視と預言者的声＞の主体であるカトリック・世界教会協議会・世界福音同盟が、「目に見えない仕方で・それとは気づかない仕方で・すでに・悪鬼化している」という主張が行われたわけです。しかも、カトリックと世界教会協議会については、「キリスト教ではなく、背教の教会である」という主張が、みなさまから行われたわけです。

この主張にまったく反論しないで承認してしまいますと、その帰結は、「将来に悲観的な前千年期再臨説」ということになり、「教会も悪鬼化し、国家も社会も悪鬼化し、世界はすでに、バビロンによって牛耳られている。もはや、教会は、なすすべもない。ひたすら携挙を待つしかない」という世界観になってしまうのです。

これであったら、「前千年期説という悲観論で人生を棒に振るな。楽観的な再建主義によって、キリストと共に勝利者となろう」という再建主義の主張に対しては、何ら、反論にはならなくなってしまうのです。

それゆえ、わたしとしては、「悪鬼的天使的諸力としての国家権力」と「キリスト者の世界的連帯による監視と預言者的声」という命題は、絶対に譲ることの出来ない、防衛ラインであるわけです。

しかし、この二点をめぐる議論が、カトリックと世界教会協議会にのみ集中するようになり、再建主義の話題よりも、カトリックとエキュメニズムの話題のみで占拠されるようになってし

まいました。

これについては、みなさまからも、ここの看板である「再建主義ウォッチング」の趣旨から外れている、というご指摘がありましたように、わたしとしても違和感を感じ始めていましたので、わざわざ別に掲示板を用意して、カトリックとエキュメニズムについての議論は、そちらに移行してくださるようにと、これまで四度にわたってお願いして来たわけです。

管理者としましては、今後はみなさまに、カトリックとエキュメニズムに対する議論は、＜全地公会議への道＞ウォッチング掲示板へ移行していただくこととし、この掲示板は、本来の趣旨である「再建主義ウォッチング」に戻したいと思っておりますので、ご理解とご協力を、よろしくお願いいたします。

＜全地公会議への道＞ウォッチング掲示板

575 掲示板の題名を変えてください。 JOG - 2004/09/17 06:51 -

>「悪鬼的天使的諸力と国家権力」という新約聖書神学の世界観は、フランシスコ会聖書研究所訳の新約聖書の脚注によく記されていますから、ぜひお読みになることをおすすめします

プロテスタントの信徒に、カトリックの訳の聖書を読むことを勧めています。このこと自体の異常性に気が付いているのでしょうか？無自覚にされているのでしょうか？

また、３人の証言に対して、全く答えようとせず、自分の主張のみを書き込んでいます。このことも、わかっていてあえてしているのでしょうか？無自覚なのででしょうか？

私も山谷さんの姿勢を真似て、２度目のお願いをします。
掲示板の題名を変えてください。

574 新約聖書正典をめぐって 山谷 - 2004/09/17 01:41 -

「有機的逐語霊感説」は、十全霊感説と機械的逐語霊感説との中間より右寄りに位置する、保守的な見解です。

「山谷神学」については、わたしは、神学大学で専門の勉強をしていませんから、自分では神学についてはアマチュアだと考えています。
この掲示板で議論している事柄は、けして、わたしのオリジナルなどではなく、シュリーア、デーン、バルト、クルマン、ベルコフ、ケアードといった神学者たちが、1930年代からずっと考え続けて来た事柄です。
「悪鬼的天使的諸力と国家権力」という新約聖書神学の世界観は、フランシスコ会聖書研究所訳の新約聖書の脚注によく記されていますから、ぜひお読みになることをおすすめします。
バルトの『義認と法』はバルト著作集に、クルマンの『キリストと時』は岩波書店から、ベルコフの『キリストと諸権力』は新教出版社から、日本語で出ています。神保町の友愛書房に行けば、入手できるでしょう。ベルコフの『キリストと諸権力』が薄い本で、一番読みやすいと思います。

この掲示板でカトリックとエキュメニズムを論じ続けることは、再建主義ウォッチング掲示板というここの看板にそぐわない、ということは、わたしが感じ続けて来たことです。そのために、別の掲示板を用意したわけです。みなさんも、同じ違和感を持っておられるようですので、これで四度目のお願いとなりますが、今後もカトリックとエキュメニズムを「悪鬼化し

た・背教の教会であり・キリスト教ではない」という主張を展開されたいのであれば、ぜひ、＜全地公会議への道＞ウォッチング掲示板に議論を移行してくださいますよう、お願いいたします。

＜全地公会議への道＞ウォッチング掲示板

なお、「新約聖書正典をめぐって」と題する小論を作成しました。新共同訳聖書の意義も考察しておりますので、お読みくだされば幸いです。

「新約聖書正典をめぐって」

573 残念です けいじ - 2004/09/16 08:58 -

残念ですが、私もJOGさんのご意見に賛成です。山谷神学と名づけても良いでしょうが、その前に、掲示板における議論がいつまでもかみ合わないために、起こっている結果だと思います。

私が質問しても、一番言いたい論点や主張点は素通りされて、論点ではない言葉の表現の部分で反論をされたり、完全に日本語を誤解されている場合もありました。

そうすると結果的に、ただのおじさんのように、とにかく問題を追及して、あぶり出しの論法を取らざるを得なくなるか、富井氏のように早々に議論を打ち切らなければいけなくなります。

せっかくこれだけの情報を載せた、YAHOOにも掲載されたサイトなのですから、理想としては山谷さんご自身が、持論の発表会ではなく、もっと行司役のほうに回っていただければ、上の掲示板の説明どおりの目的を果たせると思います。ご検討いただければ幸いです。

572 私も追伸 JOG - 2004/09/16 01:00 -

私ももう発言しないと書きましたが、追伸として、その後のやりとりに対する意見を書きます。

＜全地公会議への道＞ウォッチング掲示板にではなく、ここでやりとりをすべきだという、ただのおじさんの意見に賛成です。

根拠として、この掲示板の内容が「再建主義ウォッチング掲示板」という題名にそぐわないからです。「山谷神学推進掲示板」という名前が正確に内容を表しているからです。

私の山谷さんへの提案はこの掲示板を「山谷神学推進掲示板」と名前をかえることです。

私も一参加者として、再建主義に対しての意見交換をしたくてこの掲示板にきたのに、まったく思いもしない特殊な神学論争に巻き込まれそうになりました。

このような題名と内容が違う掲示板は良くないと思います。

カトリックの話題を別の掲示板に移しても、その性質は変わらず、もしろ、カトリックについての話題を論ずることが、その問題をも明確にすると思います。また、「山谷神学」の特殊性をもあぶり出してくれると思います。

掲示板は私的な場でしょうが、ネットは公共の場ですからあまり、内容と題名が違うということは良くないと思います。

削除する権利はありますが、発言する権利もあると思います。

また、ただのおじさんに提案ですが、この掲示板とは別に再建主義について意見交換できる掲示板をつくりませんか？

「山谷神学」が十全霊感をも否定する特殊な神学だということがわかったのですから、再建主義の議論の相手にもならないのは明確ですよね。

いのちのことば社「新キリスト教辞典」より引用
「日本においては，特に聖書の権威を擁護し，聖書信仰を推進するため1960年[+]日本プロテスタント聖書信仰同盟（JPC）が設立された．その規約には「聖書は十全霊感による誤りなき神の言であり，信仰と生活との唯一無謬の基準であると信ずる」とある．続いて1970年には「聖書の十全霊感を信じる福音主義キリスト教の立場に立つ」日本福音主義神学会が生れ，福音主義の霊感理解に立ちつつ，聖書の学問的な研究が進められてきた．しかし近年，そうした諸団体の掲げる聖書観の内容を巡って議論が生じてきている．そうした中で同神学会は，「聖書論と釈義」（1983年），「釈義から説教へ」（1985年），「福音と文化」（1987年）といったテーマの下に，神学研究会議を開催してきた．すなわち聖書の霊感や権威の問題から出発して，聖書の解釈，聖書の適用にまで議論を進め，聖書自体のあかしする聖書観の正しい理解を求めてきたのである．神学と信仰のあらゆる営みの出発点として，聖書の霊感を正しく理解する努力は今後も続けられなければならない」

こんな特殊な神学を構築しなければ再建主義と議論できないなんて、そのこと自体が、再建主義にたいしての敗北宣言に等しいです。

富井氏が早々と議論を打ち切ったのは賢明な判断ですよね。
山谷神学と比べると、再建主義はプロテスタントですね。

どうぞこの掲示板は「山谷神学」の信者さんたちでもりあがってくださいよ。日本に何人いるのかな？

571 全地公会議・地方公会議・カトリック・プロテスタントの問題について 山谷 - 2004/09/16 00:00 -

三度目のお願いとなりますが、カトリックとエキュメニズムについての議論は、＜全地公会議への道＞ウォッチング掲示板に移行してくださるよう、お願いいたします。

＜全地公会議への道＞ウォッチング掲示板

管理者の削除権限については、これは、神学的には、宇宙論的な15の法領域に即した＜社会の分散主権＞の中のひとつであり、これもまた、キリスト頭首権に由来するものと考えることができますので、三位一体的統治の概念図においては、管理者の削除権限は、国家や教会であっても侵すことの出来ない、市民的自由である・・・という、議論も、おもしろそうですね。

ところで、再建主義をめぐる長大な議論のどこかで、一度ならず述べていることだと思いますが、わたしは十全霊感論者ではなく、有機的逐語霊感論者です。誤解があるようですので、この際、確認しておきます。

なお、「全地公会議・地方公会議・カトリック・プロテスタントをめぐる問題」と題する小論を作成しましたので、お読みくだされば幸いです。

「全地公会議・地方公会議・カトリック・プロテスタントをめぐる問題」

570 この掲示板に関する質問をこの掲示板で答えられないのですね ただのおじさん - 2004/09/15 08:14 -

＞重ねて申し上げますが、カトリック問題とエキュメニカル問題については、＜全地公会議への道＞ウォッチング掲示板が、まさにそのために用意されていますので、議論をそちらに移行してくださるよう、お願いします。

お断りします。このやりとりはこの掲示板自体の存在理由を問うているのであって、エキュメニズムの是非はその理由としてこの掲示板でやられなくては意味がありません。そうである以上、他の掲示板でするならばそれはあなたがこの掲示板の存在理由の説明を放棄したと見なします。なぜならこの掲示板に関する質問の答をこの掲示板でできない以上、この掲示板は必要ないからです。
そして万が一これらの発言を削除された時には、あなたはこの掲示板の管理人の資格を放棄したことを何度もこの掲示板で宣言します。

＞全地公会議

公会議の権威で聖書が正典になったのではありません。公会議の権威で私たちクリスチャンは聖書を正典と見なしているのではありません。それはカトリックの理屈であり、一般のプロテスタントにしてみれば、聖書の正典性は神の霊感によって保証されているのです（言語十全霊感説）。問題はそちらがカトリックの論理に従っていることにあるだけです。（１）～（４）まで長文書かれておられますが、すべてカトリックの論理に従った同趣旨の文章なのでこれで返答はおしまいです。
それにしても、あなたは言語十全霊感説を認めていないようですが、エキュメニズムは言語十全霊感説を認めないのですか？
再建主義者だって言語十全霊感説は認めているのですよ。
それでは再建主義を批判することはできませんね。
エキュメニズムはカトリックの正典観まで取り入れているのですか？
そこまでやればもはや今の時点でカトリックとエキュメニズム運動家は同じですよ。

569 聖書正典（旧約）について（４） 山谷 - 2004/09/15 00:11 -

西方教会は、布教の方針として、当時の通俗語であった「民衆ラテン語」に訳されたウルガタ訳聖書を、公認聖書として使用していたわけです。その状態が15世紀まで続きました。

15世紀になると、教会改革者たちが国語聖書の翻訳を開始し、それに基づいて、教会批判と改革運動を推進しました。

16世紀になると、教会改革の頓挫を受けて、宗教改革が開始され、人文学者たちがヘブル語・ギリシャ語の写本研究に基づく国語聖書の翻訳を開始し、それに基づいて、教会批判と改革運動を推進しました。

これに対する防衛として、カトリック教会は国語聖書を禁止し、ウルガタに含まれる文書すべ

てを正典とする決定を、トリエント公会議において行いました。

このことを予知していたなら、きっと、ヒエロニムスは、当時の地方教会で使用されていた諸文書の全部を民衆ラテン語に翻訳することは、しなかったでありましょう。なぜなら、彼は、ヘブル語聖書のみを正典とするよう主張していたのですから。

そうなりますと、ヘブル語聖書を正典とするよう熱心に主張していた当の本人の心血を注いだ労作が、1000年の年月を経て、かえって仇をなすこととなってしまったわけです。

そうしますと、**ヒエロニムスは、自分の信念を曲げないために、そもそも一切の翻訳をすべきでなかったのだろうか？** という問いを立てることが出来ます。

彼が、セプチュアギンタ全部と、ヘブル語にはなくギリシャ語でのみ存在する文書をも、民衆ラテン語に翻訳するような「あいまい」なことをしていなければ、1000年後のトリエント公会議の誤謬は、回避されていたでありましょう。

だから、ヒエロニムスはヴルガタを作るべきではなかったのだろうか？

だが、**もしヴルガタが存在しなかったら、ローマ帝国を滅ぼした蛮族たちを教導して、1000年後のルターやカルヴァンを輩出することを可能にするようなキリスト教文明を築くことが、出来たのだろうか？**

568 聖書正典（旧約）について（３） 山谷 - 2004/09/15 00:10 -

急増するキリスト者に脅威を感じたユダヤ人たちは、キリストの弟子たちと自分たちを明確に分離し、「ユダヤ教徒」としての自己同一性を確立する必要に迫られて、紀元90年にパレスチナのヤムニアにラビたちが集結し、ヘブル語で記された39巻の書物を、神の霊感によって記されたものと決議しました。もっともその後100年以上に渡って、ラビたちの間で激論が戦わされたのですが。

その間も、また、その後も、キリスト者は、あいかわらずセプチュアギンタを礼拝と教育に使用し続けていたのです。

この状況を変えたのが、4世紀のヒエロニムスです。彼は、ヘブル語の39巻を正典とするよう、強く主張したのです。

結果として、西方教会は、ヒエロニムスの主張を採用して、ヘブル語の39巻を正典とするようになりました。

本来であれば、このときに、ローマ教皇は強力な指導力を発揮して、ヘブル語の39巻だけが正典であり、それ以外の文書は教会の礼拝と教育から徹底的に排除するよう指導し、強制すべきであったのでしょう。

しかし、残念ながら、当時のローマ教皇は、地方教会が独自の慣行を維持する留保権を認めていました。そこで、初代教会以来、もろもろの地方教会で使用されてきたギリシャ語の文書を「準正典」と位置づけることで、引き続き使用できる余地を残す配慮をしたのです。

そうしますと、**地方教会の多様な在り方を許すべきではなかったのであるから、そのためには、ローマ教皇は、もっと強く指導し支配すべきであったのだろうか？** という問いが立てられることになります。

これについては、どうお考えになりますか？

567 聖書正典（旧約）について（２） 山谷 - 2004/09/15 00:05 -

初代教会では、セプチュアギンタを礼拝と教育に使用していましたから、初代教会のキリスト者は、カトリックが「第二正典」と呼ぶところの諸書、また、聖公会が「アポクリファ」と呼ぶところの諸書をも、何らかの意味での聖なる文書としてみなして、使用いていたことになります。

そうしますと、**初代教会のキリスト者は、今日で言う聖書正典ではないものをも礼拝と教育で使用していたのだから、厳密な意味で、彼らはすべてキリスト者ではなかった、ということになるのだろうか？** という問いを立てることができます。

これについて、どうお考えになりますか？

566 聖書正典（旧約）について（１） 山谷 - 2004/09/15 00:04 -

重ねて申し上げますが、カトリック問題とエキュメニカル問題については、＜全地公会議への道＞ウォッチング掲示板が、まさにそのために用意されていますので、議論をそちらに移行してくださるよう、お願いします。

＜全地公会議への道＞ウォッチング掲示板

それではまず、＜聖書正典＞の問題を考えて見ましょう。

聖書は信仰と実行の唯一の規範ですが、聖書の本文には残念ながら正典リストは記載されていません。

ですから、古代においては、それぞれの地方教会によって、礼拝と教育に使用している「聖なる文書」のリストが相違している、という状態があったわけです。

この問題を解決したのが、＜全地公会議＞であったわけです。

そうしますと、**全地公会議を開催しなくても、聖書正典は今のかたちになり得たのか？** という問いを、立てることが出来るわけです。

具体的には、四世紀のカルタゴ公会議と、七世紀のキニセクスティン公会議が、聖書正典のリストを決議しました。西方教会は15世紀までそのリストを保持し、16世紀の宗教改革者はそれを再確認しました。しかし、反宗教改革の立場のトリエント公会議は、原典に基づく教義の構築によってカトリック批判を展開している宗教改革者を＜やり込める＞ために、ヴルガタに含まれる全文書を正典としてしまいました。

このトリエント公会議において、カトリックとプロテスタントは、お互いが、お互いを、交わりから排除したのです。こうして「交わりを絶ったキリスト教」が誕生しました。

そもそも四世紀と七世紀に公会議を開いて聖書正典のリストを決議しなければならなかったのは、もろもろの地方教会の間で、「聖なる文書」のリストが相違していたからです。

すると、もし＜絶対的地方教会主義＞に立つのであれば、世界信条はおろか、聖書正典をも放棄しなければならないことになります。なぜなら、世界信条だけでなく、聖書正典もまた、それを決めたのは、全地公会議であるからです。

この点について、どうお考えになりますか？

561 したがって けいじ - 2004/09/14 21:07 -

山谷さまが言われた

> カトリックがキリスト教ではないことを、わたしに認めさせたいのであれば、まず、カトリックが聖書正典を放棄していることを論証し、次に、司教の＜解き・また・つなぐ＞権能が放棄されてオープンコミュニオンを導入していることを論証し、さらに、世界信条のすべてを放棄していることを論証しなければなりません。

という論理は、無意味になります。放棄ではなく＜付加＞が問題だからです。

560 付け加える罪 けいじ - 2004/09/14 20:50 -

私もしばらくのこと、カトリックとはどのような存在なのか分からないで、もやもやとしていました。今ははっきりとした答えを持っていますが、それは、カトリックが、

「付け加える罪」

を犯していることです。山谷さまが言われるように、キリスト教の根本要素をカトリックが有しているのはその通りです。三位一体、キリストの贖罪、からだの復活、再臨、普遍の教会、礼典など、みな信じています。そして、いわゆる異端と呼ばれている団体（エホバの証人など）は、これらの多くを取り除くことによって、異端とみなされます。

ところが、カトリックはそれらの基本教理に付け足した教えがあり、そして実際上、それらの教えが基本教理を台無しにしている、つまり、律法学者らが犯した、人の教えによって神の戒めをないがしろにしている、という罪を犯しています。

私も実際に、カトリック教会の会堂を訪問したことがありますが、二つのことを感じました。一つは、「ごった煮」です。確かに良いものが含まれていますが、あまりにもいろいろ異質な要素が詰まっています。

もう一つは、「人間主義」的です。再建主義の富井氏のサイトにもあるように、その神が事実上「不全」というか、あらゆる領域に主権と力をもっておられる神となっていません。だから、聖人、秘跡による救い、マリア崇敬、教皇の無謬性など、キリストとそのみわざ以外のものが突出してくるのです。

ゆえに、宗教改革者が、sola（〜のみ）という言葉を使って、キリスト教会が立つところをはっきりと示したのです。

このくらいのことは、山谷さんにとって、あまりにも初歩的なことだと思いますが、エキュメニズムも「ごった煮」の考えが反映されています。

559 ではこれらをみんな認めてもキリスト教なのですね ただのおじさん - 2004/09/14 09:39 -

カトリック要理の友

より、よく読めば非常に問題のある箇所。これを容認してキリスト教ですか？

第６課天使

第９課聖母マリア

第１７課カトリック教会

第２０課後の世

第２１課祈り

第２３課洗礼

第２４課堅信・聖体

第２５課ミサ聖祭

第２６課告解

第３０課愛の掟と神の十戒

第３１課第１、２、３戒

第３４課教会のおきて

558 エキュメニズムに再建主義を批判する資格があるか ただのおじさん - 2004/09/14 02:45 -

>エキュメニズムとカトリックの是非については、この掲示板ではなく、＜全地公会議への道＞ウォッチング掲示板にて論じてくださるよう、お願いいたします。

いいえここで論じます。なぜならエキュメニズムの側に再建主義を批判する資格があるかどうかが問題となっているからです。それはここの掲示板の存在の正当性に関わることだからです。

>カトリックとエキュメニカル運動加盟教会は、すべて背教の教会であり、キリスト教ではない、と断言してしまいますと、改革派教会世界連盟も、スコットランド長老教会も、モラヴィア教会も、メソジスト教会も、ルーテル教会も、聖公会も、フス派教会も、ワルドー派教会も、すべてみな背教の教会であり、キリスト教ではない、というのが、論理的帰結になってしまいます。

ハイそうです。ですから、エキュメニカル運動から抜ければいいのです。そうでなければ、背

教の教会と言われても仕方がありません。そのくらい、反エキュメニカルのクリスチャンなら当たり前に言いますよ。

>これが結論になるのであったら、キリスト教弁証学としては失敗でありましょう。

エキュメニカル運動から抜けなければ背教の教会で当然なのですから何も失敗ではありません。

>「聖書正典」において

カトリックには聖伝というのがあります。これは聖書正典と同等の権威があり、それは聖書正典の権威を損ねています。
その聖伝はカトリック教会が認定するものです。聖書の権威もカトリック教会が与えた権威として見ています。そして当然の帰結として、聖書をカトリック教会の権威によって認定されたものと考えています。さらに聖書を、信仰と生活における唯一の権威とは考えてもいません。外典をも含めた聖書と聖伝を権威と考えているのです.
カトリックは聖書から削っていないとも言えません（第２戒問題というのがあります）が、付け加えていることは明白であり、そのことは聖書自体によって否定されています。
よってあなたの定義は聖書の正典性という要の部分で崩壊しています。

>世界信条

カトリックの公教要理を読んでいないようですね。これに抵触する教えはカトリックには幾つもあります。

カトリック要理の友

カトリックには煉獄というのがあるのですよ。煉獄に絡む教えを吟味すれば、世界信条にすら反するのは明らかでしょう。キリストの贖罪の完全性を否定しているから煉獄という教えが成立するのですよ。ホンの一例ですが。キリストの贖罪死は、その贖罪の完全性をも意味するのは別に神学を知らなくても分かることですね。

>カトリックが聖書正典を放棄していることを論証

放棄していなくても付け加えていれば同じことです。聖書においては同罪なのですから。

>次に、司教の＜解き・また・つなぐ＞権能が放棄されてオープンコミュニオンを導入していることを論証

リンク先の公教要理は３６もあるので１つ１つ吟味するのは手間なのですが、カトリックの聖職者が、いかに、聖書から逸脱したことをしているのか公教要理を読めば分かります。日本語で書いてありますから。

>世界信条のすべてを放棄していることを論証しなければなりません。

なぜ「すべて」なのですか。キリストの贖罪死を認めていなければそれで十分でしょう。それともキリストの贖罪死だけ認めなくい場合、あなたはそれをキリスト教と呼びますか？

557 キリスト教の定義（３） 山谷 - 2004/09/14 01:06 -

わたしの「キリスト教の定義」の要件を、カトリックにあてはめてみますと、カトリック教会は（1）聖書正典を奉じており、（2）監督が共同体の生活を治めており、（3）世界信条を告白しています。

ですので、わたしの定義によるならば、カトリックはキリスト教である、ということになります。

しかし、カトリックは、プロテスタントと「交わりのある教会」ではありません。

なぜなら、プロテスタントの監督たちは、宗教改革の時代に、監督の＜解き・また・つなぐ＞権能を執行して、カトリックとの交わりを絶ったからです。これは、具体的には、陪餐禁止にした、ということです。さらにまた、カトリックの司教たちは、反宗教改革の時代に、司教の＜解き・また・つなぐ＞権能を執行して、プロテスタントとの交わりを絶ったのです。これも、具体的には、陪餐禁止にした、ということです。

そうしますと、カトリックもプロテスタントも、聖書正典を奉じていることと、世界信条を告白している点とでは、共に同じであるわけです。そうして、カトリックもプロテスタントも、＜解き・また・つなぐ＞権能を執行して、共同体の生活を規制している点で、やはり、同じであるわけです。その意味では、わたしの定義によるならば、両方とも、キリスト教ということになります。

では、どこが問題であるかというと、お互いが、お互いの「使信」すなわち聖書解釈とその結果引き出されるメッセージについて見解を異にし、さらにまた、「共同体の生活」の在り方（たとえば終身誓願としての修道士、司祭の独身制、礼拝式文の構成、教皇の首位権など）について見解を異にしたために、双方の監督が、双方の＜解き・また・つなぐ＞権能を執行して、「交わりを絶った」のです。

このようなわけで、カトリックにとってのプロテスタント、プロテスタントにとってのカトリックは、共にキリスト教であるけれども、「交わりを絶ったキリスト教」であるわけです。

さて、カトリックにとっての世界教会協議会、世界教会協議会にとってのカトリックは、まさに、いまだに、「交わりを絶ったキリスト教」であるわけです。なぜなら、カトリックと世界教会協議会加盟教会の大多数は、お互いにいまだに相互聖餐関係を樹立していないからです。

以上が、わたしの神学的な立場です。

カトリックがキリスト教ではないことを、わたしに認めさせたいのであれば、まず、カトリックが聖書正典を放棄していることを論証し、次に、司教の＜解き・また・つなぐ＞権能が放棄されてオープンコミュニオンを導入していることを論証し、さらに、世界信条のすべてを放棄していることを論証しなければなりません。

それができないのであれば、何を言ったとしても、わたしは決して、納得しないでしょう。

ちなみに、エホバの証人は世界信条を否定しており、モルモン教はモルモン経を正典に加えており、統一教会はキリストの受肉と贖罪死と復活と昇天と再臨を否定して、文鮮明をメシアと告白するゆえに、わたしの判断基準に照らすならば、明確に「キリスト教ではない」ということになります。

556 キリスト教の定義（2） 山谷 - 2004/09/14 01:05 -

わたしの「キリスト教の定義」は、次のようなものです。

キリスト教とは、キリストのからだである「教会」において信じられている「真理」であり、それを信じた結果として生きられている「共同体の生活」であり、その共同体に新たに加わる人々を招こうとして、世界のいたるところで宣べ伝えられている「使信」です。 その真理は、「聖書正典」において明らかにされています。 その共同体の生活は、「監督」によって治められています。 その使信は、聖書正典の正しい解釈を要約した「信条」によって規定されています。

以上の定義によるならば、聖書正典を奉じ、監督によって治められ、世界信条を告白する教会が、わたしにとっての「キリスト教」ということになります。

逆に、キリスト教でないもの、とは、次のようなものです。

１．聖書正典を奉じないのは、キリスト教ではない。

２．監督が＜解き・また・つなぐ＞戒規を執行しないのは、キリスト教ではない。

＜解き・また・つなぐ＞権能を執行しない共同体というものが仮に存在するとしたら、それは、どんな教えが奉じられていようとも誰ひとり気にしない、どんな教義が語られていても一切自由勝手、倫理に反するどんな生き方をしても、まったく問題にならない、という共同体になってしまいます。

３．世界信条を告白しない教会は、キリスト教ではない。

必ずしも文字通りの世界信条ではなくても、三位一体、キリストの受肉、贖罪死、復活、昇天、再臨、キリストのからだなる教会を信じ、告白しているのであれば、「世界信条に連なる信仰を告白している」ということになるわけですから、キリスト教とみなされます。

逆に、三位一体、受肉、贖罪死、復活、昇天、再臨、キリストのからだなる教会を一切告白しないのであれば、それは、世界信条を否定することになりますから、キリスト教ではありません。

553 キリスト教の定義（１） 山谷 - 2004/09/14 01:01 -

エキュメニズムとカトリックの是非については、この掲示板ではなく、＜全地公会議への道＞ウォッチング掲示板にて論じてくださるよう、お願いいたします。

＜全地公会議への道＞ウォッチング掲示板

カトリックとエキュメニカル運動加盟教会は、すべて背教の教会であり、キリスト教ではない、と断言してしまいますと、改革派教会世界連盟も、スコットランド長老教会も、モラヴィア教会も、メソジスト教会も、ルーテル教会も、聖公会も、フス派教会も、ワルドー派教会も、すべてみな背教の教会であり、キリスト教ではない、というのが、論理的帰結になってしまいます。

これが結論になるのであったら、キリスト教弁証学としては失敗でありましょう。

552 信条や神学は絶対ではない ただのおじさん - 2004/09/13 20:46 -

ということが分かったので山谷さんとの話を他の人は打ち切ったのでしょう。山谷さんはいつまでも神学、信条、の話ばかりで、カトリック教会という背教者といつまでもくっつこうとしているという点が問題であるという点に耳を塞いでいるのでみんな呆れているのですよ。

カトリック教会の存在と不分離のいかなる神学も、カトリック教会がキリスト教会と見なしていない人間にとっては、神学ではありません。

しつこく聞きますよ。
「カトリックはキリスト教ですか」
イエスかノーか、その理由と一緒に述べて下さい。

カトリック要理の友

551 山谷さん以外の方へ ただのおじさん - 2004/09/13 19:56 -

カトリック要理の友

これを１つ１つ検討しませんか？
そうすれば、エキュメニズムの立場に立つ神学を再建主義者が自分たちへの反論と見なすかどうか分かりますよ。何しろ再建主義はカトリックに批判的なんですからその理由を調べるのにはうってつけでしょう。

550 平行線を打開する方法はあるよ！ ただのおじさん - 2004/09/13 19:49 -

「カトリックはキリスト教ですか」という質問にあなたが明確に答えればいいだけですから。それなのにあなたは、神学を持ち出して答えないので平行線になったのです。平行線であることはあなたの意見の正当性を保証しないのです。

しつこく聞きますよ。
「カトリックはキリスト教ですか」
イエスかノーか、その理由と一緒に述べて下さい。

カトリック要理の友

さあ、打開策は示しました。あなたが答えれば打開します。答を出さずにいれば、打開しない責任はあなたにあることになります。これは神学以前の問題です。何も神学が分からなければ答えられない問題でもありません。何なら「カトリック教理の友」を１つ１つ検討しましょうか？
これはクリスチャンならできる簡単なことです。

549 山谷さんの主張では再建主義者は反論すらしない ただのおじさん - 2004/09/13 19:34 -

なぜなら、反論するにも値しない論だからです。
私が再建主義者なら、こんな反論しかなければ大喜びしますね。反論する必要がなければ、反論を考える手間が省けますし、反論できなかったのか、と、あなたに言って以後はあなたの発言など無視するだけです。

>悪鬼的天使的諸力と国家権力の問題は、ハインリッヒ・シュリーアからヘンドリクス・ベルコフに至るまで、相当な神学者たちによって論じられて来たものですから、そう簡単に覆すことの出来るものではないと思われます。

彼らはエキュメニズムに賛成ですか？
それなら、カトリックなどキリスト教徒も思っていない再建主義には通用しない神学です。
もし彼らがエキュメニズムに反対なら、彼らの理論をエキュメニズムの立場のあなたが流用するのは間違いです。
エキュメニズム自体が問題なのであって、再建主義者は、あなたがいかなる理論構築をしようが、あなたがエキュメニズムであるだけで議論の相手にすらなっていないと考えているのです。ですから彼らからの唯一の質問は私が先にも質問し、答を明確にもらっていない質問、「カトリックはキリスト教か」というものです。
カトリックがキリスト教でないならば、それと合同しようとするエキュメニカル運動もキリスト教の運動とは判断しません。それは再建主義者もカトリックをキリスト教と見なしていない以上当然のことです。
分かりますか？
神学論争というのはキリスト教徒同士で行われるのであって、カトリック（背教者）というキリスト教でないものや、そういう立場と合同しようとするエキュメニカル運動の人たち（背教者の仲間）とするものではないのです。
そして忘れてはならないことは、このローマ・カトリックと戦って死んだ殉教者が歴史上数多くいること、そしてそうである以上は、ローマ・カトリックと手を組んで妥協しているエキュメニカル運動をしている人間は、あなたが何と反論しようが、殉教者の血を否定しているということです。そこまで来れば、こう言えるでしょう。エキュメニカルズムに賛同する組織はカトリックと同じく背教者であるということを。

言っておくけどね、私の周囲ではこの位では穏健な意見なんですよ。何しろ再建主義とは違った意味できわめて戦闘的な立場（根本主義）なのですからね。

548 おつかれさまでした 山谷 - 2004/09/12 01:19 -

掲示板を移行しての「エキュメニズム問題」の議論、また、「悪鬼的天使的諸力と国家権力の問題」の議論は、ずっと平行線で来ましたが、ＪＯＧさまも、ただのおじさんさまも、けいじさまも、一応完了宣言をされたことで、ひとくぎりついたようです。おつかれさまでした。

悪鬼的天使的諸力と国家権力の問題は、ハインリッヒ・シュリーアからヘンドリクス・ベルコフに至るまで、相当な神学者たちによって論じられて来たものですから、そう簡単に覆すことの出来るものではないと思われます。また、再建主義との論争においては、この＜摂理論的国家権力論＞が、わたしにとって再建主義への第一防衛ラインになっているわけですから、なおさらのこと、譲ることが出来ませんでした。ご容赦くだされば幸いです。

もし、有力な反論によって、この第一防衛ラインが破られることがあれば、再建主義との戦いは、第二防衛ラインである＜一般恩恵的国家権力論＞にまで後退することになります。その場合は、新約聖書神学を前提にして、一般恩恵の是非について考える、という展開になります。

なお、日本のキリスト者においても、「国家と教会」の神学の研究が求められてきており、「国家と教会」学会も設立され、例会を開いていると聞いております。＜摂理論的国家権力論＞あるいは＜天使論的国家権力論＞は、ドイツの告白教会の闘争との関連で、とても重要なテーマであると思いますので、「天使論の議論は決着済み」ということでパスしてしまうのではなく、ぜひ、シュリーア―バルト―クルマン―ベルコフのラインで、また、新約聖書神学の

再検討とあわせて、時間をかけて議論していただきたいものだと思います。

547 悪鬼的天使的諸力の問題について（２） 山谷 - 2004/09/12 01:09 -

キッテル『新約聖書神学事典』での記述から、次のように言うことができるであろうと思われます。

１．悪鬼的天使的諸力が国家権力を委任されているという概念は、後期ユダヤ教と新約聖書神学においては、自明の概念である。そのことは、ダニエル書10章において顕著であり、また、エゼキエル書28章において、＜都市国家ティルスの王＞が、＜ティルスの領域主権の天使＞と同一視して描写されていることからも、明らかである。
同様にして、コリント前書2：8の「この世の支配者」（アルコーン）という用語もまた、＜ローマ総督・サンヒドリン・官憲＞を指していると同時に、＜この世を支配する悪鬼的天使的諸力＞を指している、と釈義することが可能である。このコリント前書2：8における「この世の支配者」（アルコーン）という用語の“両義性”を、ローマ13章の「権威」（エクスーシア）に照射して、エクスーシアの後期ユダヤ教的・新約聖書神学的用法を適用するならば、ローマ13章の「中間時の中間倫理」の命令は、＜人間の立てた制度としての国家権力＞に対する服従を命じている、とも、＜キリストの頭首権的支配の下にある悪鬼的天使的諸力としての国家権力＞への服従を命じている、とも、見ることが出来る。（この議論については、オスカー・クルマン『キリストと時』第三部冒頭を参照）

２．天使と悪鬼は、別個の概念範疇ではなく、摂理論の中の天使論という同一範疇において取り扱われるべきものである。悪鬼論は天使論に対して並立するのではなく、あくまで天使論の下位部門であるに過ぎない。

３．国家権力の源泉は、神にある。神は、アダムに対して「地を支配せよ」と命じて、地の支配権をアダムに与えた。アダムが堕罪したために、神は中間領域を設置し、天使的諸力（ケルビム）に国家権力（剣）を与えた。これにより、地の支配権は、アダムから天使的諸力に移行した。天使的諸力は、その任務から離れたために、悪鬼化し、そのことが、ノアの洪水の原因となった。洪水後、神は、悪鬼的天使的諸力に領域主権を与え、「主権国家」が設立された。これらの具体例が、ギリシャの天使長、ペルシャの天使長、ティルスの天使長である。
国家権力は、＜神に由来する領域主権＞と＜領域主権を委任された悪鬼的天使的諸力＞と＜領域主権の行使の器として人間が立てた政治制度＞という、三つの側面がある。第一の側面を見るときに、国家権力は神的である。第二の側面を見るときに、国家権力は悪鬼的である。第三の側面を見るときに、国家権力は、人間が作った制度である。

４．現経綸において、国家権力の源泉は、神にして人であるキリストにある。キリストは、十字架と復活によって、すべての悪鬼的天使的諸力を打破し、「地の支配権」を奪い返された。いまや、「地の支配権」を持っておられるのは、＜人の子＞として御座に着いておられるキリストである。悪鬼的天使的諸力は、打破されて武装解除されたゆえに、もはや、国家権力（剣）を持つことが出来ない。国家権力は、悪鬼的天使的諸力から取り上げられて、彼らは、滅ぼされることになる。しかし、中間時においては、＜堕落した人間の社会の秩序と安寧を維持するミッション＞としての諸国家が、まだなお、必要とされている。それゆえ、キリストは、キリスト頭首権に由来する領域主権を、打破された悪鬼的天使的勢力に委任し、彼らに諸国家を統治させている。これは、キリスト再臨をもって、終焉させられる。
現経綸における国家権力は、＜キリスト頭首権に由来する領域主権＞と＜領域主権を委任された悪鬼的天使的諸力＞と＜領域主権の行使の器として人間が立てた政治制度＞という三つの側面がある。第一の側面を見るときに、国家権力はキリスト的である。第二の側面を見るときに、国家権力は悪鬼的である。第三の側面を見るときに、国家権力は、人間が作った制度である。

546 悪鬼的天使的諸力の問題について（１） 山谷 - 2004/09/12 01:08 -

悪鬼的天使的諸力の概念に関連する新約聖書の用語は、エクスーシア、アルコーン、デュナミス、スロノス、キュリオテースです。

これらの用語について、キッテルの『新約聖書神学事典』は、次のように述べています。

エクスーシア

超自然的諸力を指す、新約聖書における特殊用法。「この世の支配者」と共に用いられることが多い。ヘレニズムやグノーシス主義には見られない用語であるが、『イザヤの昇天』、『12族長の教訓』、キリスト教グノーシス主義諸文献、黙示的使徒言行録において見られる。エクスーシアは、ユダヤ教の土壌において発展した概念を基礎としており、悪鬼とは区別されるが、この世の支配者とは曖昧不可分な、宇宙的諸力を指す。パウロは、ユダヤ教における「自然界を支配する諸力」の概念を、ヘレニズムにおける「宇宙を支配する諸力」の概念と合わせて使用している。かくて、神と人間との間にあって、人間の生活を支配する様々な諸力が存在していることになる。エクスーシアは、被造物としての性質を持ち、キリストにあって、キリストのために創造された（コロサイ1：15–16）。緊張関係が存在するものの、二元論ではない。エクスーシアは、人間をキリストから引き離すことが出来ない。

アルコーン

社会における「高官」を指す用語。ダニエル書10章では、諸国を代表し守護している天使的存在の意味で使用されている。
新約聖書では、パリサイ派が＜イエスの悪霊追い出しはベルゼブルによるものだ＞と論難した文脈において、「悪鬼の王」の意味で用いられている（マタイ12：24）。しかし、アルコーンの力は打破されている（ヨハネ12：31）。アルコーンは、罪のないキリストに触れることすら出来ない（ヨハネ14：30）。アルコーンは、すでに裁かれている（ヨハネ16：11）。パウロは、アルコーンが非キリスト者の中に働いている、と言う（エペソ2:2）。この支配するアルコーンの力は、彼らが無知のゆえに、栄光の主キリストを十字架につけたために、失われることとなった（コリント前書2:8）

デュナミス

キリストの出来事は、悪鬼的諸力としてのデュナミスについて、明らかにしている。新約聖書は、悪鬼的諸力の存在を認めている。それらは、宇宙的諸力であると同時に、天使的諸力でもある。悪鬼的諸力は、キリストの復活によって打破され、キリストの再臨に際して、公然とさらしものにされることとなる。復活と再臨との間に、緊張状態が存在する。悪鬼的諸力は武装解除されたが、それは、信者が神から新しい命を受けて、神の支配の下に移されたからである（エペソ1：20–21、ローマ8：38–39）。それでもなお、悪鬼的諸力は戦っているが（黙示録13：2）、最終的には降伏する（1コリント15：24）。反キリストは、悪鬼的諸力と共に到来し、偽りを広めるが、キリストの再臨によって、ついに滅ぼされる（2テサロニケ2：9）。

スロノス

天使の階層の一つ。コロサイ1：16において、超自然的な諸力のひとつとして言及されている。その言及によると、天使的諸力の中の最高位階を指しているように思われる。

キュリオテース

「力」あるいは「権威」を指す用語。コロサイ1：16において、天使の階層のひとつを指す用語として使用されている。ユダ書8節では、偽教師が、その自由主義ゆえに＜権威ある者をそしる＞と言われているが、そこでは天使的諸力よりむしろ、神的な栄光（あるいは神御自身）を指していると考えられる（2ペテロ2：10参照）。

545 私も完了します。 JOG - 2004/09/11 09:21 -

ただのおじさんさん、ありがとうございました。

>改革派が、長老派が、ルーテル派が、バプテスト派などを優劣つけるような意識を持って意見をやりとりするのは、キリスト教でも良くないことであると思います。

上記の教会の人たちに知人がおりますが、この掲示板で語られているような教えを聞いたことはありませんでした。

確かに、上記の人たちとは神学論争をするのではなく、「イエス様のすばらしさを証しし合う」ような関係ですので、その話題にのぼらなかったのかもしれませんが。

この掲示板が再建主義の問題点を語り合う掲示板ではなくて、また、違った特殊な神学を推進する掲示板だということがわかってきました、過去ログなどを読まずに、いきなり書き込みをした私が間違っていました。

富井氏との最初の論争にも目を通していませんでした。書き込みをする前に、これに目を通すべきでした。

けいじさん、ありがとうございました。再臨を待ち望みつつ、将来への夢や目標も見失わないクリスチャンや教会もあることがわかってよかったです。

これにて私もこの掲示板への書き込みを完了させていただきます。
どうもしつれいしました。

544 JOGさんへ（完） ただのおじさん - 2004/09/11 07:45 -

（つづき）

しかし今問題になっている点は、実はこの掲示板の主旨をはみ出しているのです。そのゆえにもう一つ掲示板が設置されたのです。

＜全地公会議への道＞ウォッチング掲示板

今のやりとりでもショックを受けられておられるＪＯＧさんには厳しいかもしれませんが、上でリンクされている掲示板でのやりとりも読んでおいて下さい。この２つの掲示板はある点で連動しているのです。
私自身は、＜全地公会議への道＞ウォッチング掲示板、において、『話し合いにはある程度共通の土壌というのが必要です。全く立場が同じでは話し合う意味がありませんが、エキュメニズムの人とは共通の土壌というのがどこをどう探しても見あたらず、対話自体が時間と労力の無駄であります。よってこの話し合いは続けることが限界であると判断し（私１人でなく私の周囲のクリスチャンの意見も聞いた上での判断です）、山谷師との対話は打ち切りとします』

と発言しております。これが上記の質問の答です。

>私も自分で聖書にむきあってさらにじぶんなりに確認してゆこうと思いますが、ただのおじさんはどのように受け止めておられるのか、参考に教えていただければ幸いです。

教理というもの、神学、信条などは、必ず聖書に書かれていることから生じているものです。そしてそれらは体系化されているがゆえに、逆に、聖書の一言一句から出発しているという点が希薄になっています。私自身のことを言えば、ローマ書を徹底的に学んだことが、今この場で発言する際の基礎となっています。そして私の教会の先輩クリスチャンたちは、知識こそ多くありませんが、クリスチャンとしての基本を確実に身に付け、常にその基本を確認し続けているということです。私は先の発言でも言ったようにかなりインターネットでクリスチャンとやりとりしてきましたが、自分が当たり前に思っている基本的なことでも、もう一度、初心に返って確認し直すことが大切ではないかと思います。私の教会では、今、キリスト教の基本を再確認するということを、教会挙げての方針として実行しています。聖書とは何か、聖書の概観、クリスチャンのすべきこと、教理問答、全て基本と言えば基本的な事柄ですが、それらを全て再確認しています。再確認を続けるうちに、このことはクリスチャンにとって大切なことであると確信しています。

（完）

543 JOGさんへ（１） ただのおじさん - 2004/09/11 07:43 -

引用などがあり文章が長くなってしまったので２つに分割しました。

>>神学、信条、が昔のパリサイ人の律法と同じになってはいけないということです。神学でこうだから、信条でこうだから、と言う前に、常に聖書と照らし合わせて確認し、バランスを取るべきであるということなのです。
>
>そのようにバランスをとられた結果、ただのおじさんさんは山谷さんの教えを聖書と照らし合わせて確認した結果、どのように受け止めておられるのですか。

まず私の過去ログmsg３０３を引用します。

『とある掲示板で終末について話をしたら、話が噛み合わなかった。後で牧師に聞いたらそれは神学が違うからしようがないことだと言われた。律法に関しても他の場所で私の意見と違う意見を聞いた。質問をいろいろと考え、牧師にも相談してみた。やはりこれも神学の違いであった。私の場合は、ディスペンセーション主義という神学であり、これは先に述べたように、異邦人とユダヤ人を同列には扱わず、霊的解釈というものも認めず、十字架・復活以後と以前は別のディスペンセーションと扱い、律法も基本的にユダヤ人あてのものと考え、終末論も基本的に前千年期説を採ります。それに対しては、契約神学と呼ばれるものがあるというのを自分で調べて知り、牧師にも確かめたりした。これはとりわけディスペンセーション主義とはことごとく異質な考え方であり、意見を交換しあっても話がずれるのは当然であまり話をする意味がないと言っていた。自分で調べてもその通りだったし、対話を諦めてしまった。ユダヤ人や律法に対する考え方があまりにも違っていて接点がなかったからだ。聖書を引用しても、聖書の読み方、解釈の仕方から違っているので、どうしようもなく諦めてしまった。そして今回も同様のことが起こってしまった。私の神学的な立場を主張すると、やはり異なる立場の神学的立場の人間が出て来て、意見が合わなくなってしまう。これはもはやどうしようもないことらしい。何しろ聖書を持ち出しても駄目なのだから、それ以上の解決策が人間にあるわけがない。』

聖書を自分なりに照らし合わせたとしても、多分、神学や信条に固守する人とは話が合わないことは私も嫌というほど体験しています。今まで友好的にやりとりをしていたクリスチャンが相手でも、相手の神学の根幹に触れる質問をすると、たちまち意見のずれが発生し、今までの友好さゆえに話を止めてしまいました。仏教の世界では「宗論は釈迦の恥」といって、神学、信条、信仰などに優劣を付けようとすることをいさめているようです。確かに、改革派が、長老派が、ルーテル派が、バプテスト派が、などを優劣つけるような意識を持って意見をやりとりするのは、キリスト教でも良くないことであると思います。

（つづく）

542 再臨は祝福された望み けいじ - 2004/09/11 07:15 -

JOGさん、

いや、本当に良い点を書かれていて、私も嬉しくなりました。

第一点は、再臨の話題についても、再建主義の話題についても共通する課題は、律法主義的にならない、ということですね。再臨については、私の思いの中では、テトス２：１３にある「祝福された望み」です。救いが、ただ恵みによって与えられるように、再臨も恵みの範疇にあります。これからずれた空中再臨の話は、気をつけなければいけないでしょう。

第二点は、地上での残された生活についてです。結局、昨日、主が戻られなかったわけですが（笑）、この地上に残されているのは、大きな理由と目的があります。キリスト・イエスをこの生活・人生を通して証しすることです。それが、主が使徒１章でおっしゃられた、「あなたがたの上に聖霊が臨みます。」ということだと思います。聖霊に満たされたところの、主を証しする生活、これもとてつもない霊的祝福です。

541 ただのおじさんへ、教えてください。 JOG - 2004/09/11 02:12 -

>神学、信条、が昔のパリサイ人の律法と同じになってはいけないということです。神学でこうだから、信条でこうだから、と言う前に、常に聖書と照らし合わせて確認し、バランスを取るべきであるということなのです。

そのようにバランスをとられた結果、ただのおじさんさんは山谷さんの教えを聖書と照らし合わせて確認した結果、どのように受け止めておられるのですか。

私も自分で聖書にむきあってさらにじぶんなりに確認してゆこうと思いますが、ただのおじさんはどのように受け止めておられるのか、参考に教えていただければ幸いです。

私は山谷さの教えを読んで、正直ショックで、冷静に考えることすらできていないと思います。クリスチャンになって１５年たちましたが、こんな教えを聞くなんて思いもしませんでした。

自分なりには、今までの信仰生活のすべてが、聖書に忠実に歩みたいと思ってきました。

正直、こんな議論したくありません。私は神学の専門家ではありません。再建主義の問題点についてわかちあいたくて、この掲示板にきたのですが、つい、ひとこと質問の書き込みをしてしまったのがきっかけでこんな展開になってしまいました。

もう、再建主義の問題点もふっとんでしまいました。

540 御言葉が明確に語っていることに jog - 2004/09/11 01:27 -

＞「天使論は、福音伝道には重要ではないので、考慮しない」と考えるのか、

天使論は福音宣教において重要だと考えます。

エペソエペソ6:12においてたちむかうべき敵であるサタン・悪霊どもは、ばらばらな、気ままな集団ではなく、リーダーであるサタンのもとに一致結束して、攻撃を仕掛けているからです。

ルカ11:17 しかし、イエスは、彼らの心を見抜いて言われた。「どんな国でも、内輪もめしたら荒れすたれ、家にしても、内輪で争えばつぶれます。
11:18 サタンも、もし仲間割れしたのだったら、どうしてサタンの国が立ち行くことができましょう。

それでは、サタンに勝利するかぎはなんでしょう。自分の信仰深さや、現代神学の知識でしょうか？

黙示録12:11 兄弟たちは、小羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝った。

＞それとも、「可能な限り、字義通りの意味で・すなわち・歴史的文献学的意味で受け取り、それにより、わたしたちの世界観を構成すべきである」と考えるのか、で、答えがすべて、違ってきます。

御言葉がはっきりと語っていることを重要視し、右か左かどっちとも取れるような、はっきりと語られていないことに関しては、無理に解釈しようとせず、人間の知性の枠組みの中にいれようとしないほうが健全だと思います。

異端の特徴はこのように聖書が明確に語っていない事柄を独自の神学体系を構築してゆくことです。

神学の分野で異端と戦う神学者の人々は専門でしょうから、どうか、その分野でがんばってください。

しかし、そうでない人に対しては、目新しい、今まで自分が知らなかった教えだからといって、ありがたがらないほうがいいと私は思います。

平凡で、単純で、決してこの世の知的水準では高くなくても、この世の学者からばかにされても、神様はこの世の学者には到底理解できない奥義を福音のうちに私たちにくださっているのですから。

第一コリント
1:26 兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらんなさい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。
1:27 しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。

539 間違いました。眠くなってきました。 JOG - 2004/09/11 01:06 -

（誤）離京されているのその人の心に福音が語られ、

（正）影響されているのその人の心に福音が語られ、

538 普通の保守的な見解 JOG - 2004/09/11 01:02 -

＞彼らの一部は、悪鬼的活動をして、教会に敵対する（エペソ6:12）。

保守的な信仰において信じられていることは、教会に敵対しているのは、彼らの一部ではなく、彼らのリーダーである、悪魔＝サタン＝堕落天使ルシファーであるということです。

ルシファーに従わなかった天使も様々な組織階級をもって主に仕えつづけていますし、国家権力に影響もしていますが、国家権力の主体ではありません。天使は霊的な世界の働きであり、この世の国家権力を担うのは人間だからです。霊的世界と現実世界は互いに影響しあっていますが、両者は明確に区別されます。

権力者がどのような宗教を信じ、どのような霊的影響をうけているか色々ですが、現代の民主主義の世の中にあって選挙で権力を手にするのは霊的存在ではなく人間です。

エジプトに様々な宗教があり影響をあたえている霊的存在がいたとしてもパロ王は人間です。

悪魔をリーダーとする悪霊の組織階級は、激しく、教会と、国家と、世界を攻撃しています。理不尽な戦争も、未成年者の凶悪犯罪も、背後には彼らの影響があることでしょう。犯罪者は何らかの「声」に従っているということが多々あったり、また、様々なオカルトや魔術・占いに系統しているケースもあります。

しかし、注意しなければならないことは、悪魔、サタン、悪霊どもに焦点を当てるのではなくあくまでも影響されている「人間」に焦点をあてなければなりません。離京されているのその人の心に福音が語られ、神の愛が示され、悔い改めて、向きを変えて、主に向くなら、その人は救われ、解放され、悪魔は何も出来なくなるからです。

この焦点をはずしてしますと、「正義と悪」「神様と悪魔」の二元的なおどろおどろしい戦いの世界に入ってしまいます。

そして、最後の日には、悪魔の人間としての代表のような存在が現れ、最後の戦いがおこるといわれています。それがいわゆる「反キリスト」の存在でしょう。

その後にキリストの地上再臨がおこり、最終的な勝利があるというのが、普通の保守的な見解だと理解しています。

537 ローマ書１３章 JOG - 2004/09/11 00:45 -

ローマ書１３章は悪霊や天使に従うことではなく、上にたてられた権威に従うということを言っているのです。

「13:1 人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。」

「存在している権威はすべて」とあります。これは霊的な存在というよりも、もっと実際的な勧めです。直接的には国の為政者にたいしてですが、「存在している権威はすべて」というところから、

家庭であれば「父、母」
学校であれば「先生」
会社であれば「上司、社長」
などとあらゆるところに適応できます。

そして、そのようにたてられた人は、「神による」というわけです。

模範的な人物としてダビデ王があげられます。

彼に対して、直接にたてられた権威とは「サウル王」です。
そして彼はダビデを妬み、憎み、殺そうとしました。
しかしダビデは、自分の命をつけねらうサウル王をやってつけるチャンスが与えられても、それをなさず、「神が油注がれた方」と最後の最後まで尊敬を表したのです。

ダビデは自分の人生を支配するのはサウル王ではなく、彼を立てられた主だから、自分で反抗せず、主が今の自分にはわからない方法でことをなされるということに信頼を置いたのです。

そのときにダビデの魂は練られ、主との関係は深まり、サウル王に続く二代目王として、また、メシアの約束の王として、準備させられていたのです。

ローマ書１３章は何も天使論を持ち出さなくても、私たちを生かす、主の御言葉なのです。

536 天使と悪鬼の区別 JOG - 2004/09/11 00:32 -

＞現経綸においては、キリスト頭首権に従属させられている武装解除された悪鬼的天使的諸力が、領域主権を担当している、ということです。

これは推論に基づいた命題です。

＞それゆえ、十字架に打破されたというコロサイ書の宣言から推論すると、これらの天使的諸力は、悪鬼的性格を有するものであるのだろう、ということになります。

と５０２に書かれてあるとおりです。これは「推論」です。

一方聖書は明確に語っています。

エペソ6:12 私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

5:9 堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通って来たのです。

悪霊どもにどんな組織階級があったとしても、そのかしらは悪魔・サタンであり、クリスチャンはしっかりと立ち向かわなくてはなりません。

ユダ1:9 御使いのかしらミカエルは、モーセのからだについて、悪魔と論じ、言い争ったと

き、あえて相手をののしり、さばくようなことはせず、「主があなたを戒めてくださるように。」と言いました。

天使は悪魔と戦う存在です。天使にも様々な組織階級がありますが、堕落天使のリーダーサタンにつかずに、主に従っている霊的存在です。

ミカエルのような天使の存在を、サタンとその仲間である悪霊どもとを
上記のような推論によって混同し、そのような推論を土台として神学を構築していっていると思います。

１．彼らは、キリストに仕えるしもべとして、キリストによって創造された（コロサイ1:15-16)

キリストは三位一体の神として、創造のすべてに関わっておられます。このコロサイの文脈はそのキリストの神性を証しすることが第一であって、（キリストは天使の一人ではなく、神ご自身。）複雑な天使論を構築するためではありません。

２．彼らは、キリスト高挙によって打破され、武装解除された（コロサイ2:14-15）

2:14 に書かれていることはm「いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。」

サタンが人間を自分の支配化に入れることのできる「罪」が無くなったから、人間に何もすることができなくなったという意味において「武装解除」と表現しています。

そして、興味深いことに、そのあとのコロサイ書の文脈は、「律法主義からの解放」について語っています。また、複雑な天使論をもてあそぶのではなく、かしらなる「キリスト」に結びつく事を勧めているようにも取れます。

３．彼らはいまや、キリストの頭首権的支配の下に置かれている（エペソ1:20-23）

十字架において、サタンの支配の根拠は「すでに」なにもなくなりました。ここで 実際的には「いまだ」罪を赦しを受けずにサタンの支配化にいる人間もたくさんいます。また罪の許しをせっかく受けていても「律法主義的信仰」によって、あたかもその恵みが何もないかのように、自分の人間的ながんばりによって「クリスチャン」ではなく「苦しいちゃん」なってしまっている人もたくさんいます。しかし、再臨の時それはすべてが完成するでしょうが、その日まで漸進的に主の御わざは進みます。

４．彼らはいまや、教会を通して示される神の知恵を、驚きをもって学んでいる（エペソ3:10-11）

しかし同時に

2:8 この知恵を、この世の支配者たちは、だれひとりとして悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。

サタンは十字架の奥義を理解することはできません。サタンは「愛」を理解できません。彼らが認めることは、その日に自らが永遠に滅ぼされることでしょう。

「再建主義大論争を回顧する」へ